
成り上がりっ！(改)

QUATTRO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成り上がりつ！（改）

【Zコード】

Z5822T

【作者名】

QUATTRO

【あらすじ】

剣を手にする。ただただ己の自由を貫き通すため。己の道を突き進むため。世界最大のダンジョン、ミーミルと呼ばれる迷宮を舞台に、RPG風な小説を書けたらいいなあ……なんて思いながら書いてます。テンプレ設定ご都合主義にご注意を。また、この小説は作者の勢いに任せて執筆されています。矛盾に感じる点がございましたら是非感想で報告をお願いします。

EXP000（前書き）

『成り上がりつゝ』の改訂版です。相変わらず「テンプレ設定」都合主義に溢れています。

また、この小説は竜園さんから許可を得て、小説『迷宮神話』を元にして作られた小説です。

以上の事柄に注意してお読み下さい。また、気に入らない場合はどうぞブラウザをバックする事をお勧め致します。

潮風が吹き波打つ浜辺。そこに1人の少年が大の字に寝転がって、空を眺めていた。

雲が流れていく。様々な形に様変わりしながら。

少年は上体を起こし、今度は海を眺める。

沈み行く太陽の光で、空も海も茜色に染まっている。

いつからだらうか、彼の記憶を遡っていくと、彼に物心が付いた時、既にこの浜辺は彼の根城となっていた。腹が減つたら魚を捕つて食し、眠くなつたら眠るだけ。

たつたそれだけの生活だが、彼は大いに満足していた。

誰にも縛られず、何者にも捕らわれず。正に自由の身である。それは彼にとって最早当たり前の事であり、いくら月日が経とうと変わらない物であった。

俺は自由だ。この自由を俺は貫いて生きていくんだ。

一振りの刀を手に、少年は自分の箱庭から外の世界へと飛び出した。

EXP001（前書き）

第3者視点での執筆になります。
作者自身の執筆能力が低い為、たまに1人称になるかもです。

ミズカルズ大陸。

そこは人間、獣人、エルフに竜人、鬼人等の多人種^{じんしゆ}が生活する混沌とした世界である。

大陸の東側には人間が統治するロール王国、西側には竜人・鬼人が支配するネルト帝国、南側にはエルフが支配するシェイズ連邦、北側には獣人が支配するケルナ王国、そして大陸の中央には多人種が共生するギルド国家ミーミルが存在する。唯一普人族はミズガルズ大陸において、世界中で見る事が出来る。

大陸の各地には迷宮^{ダンジョン}と呼ばれる古代の遺跡^{いせき}が存在する。やがて探索者^{だつさしゃ}と呼ばれ、ダンジョンに入り魔物を狩り生活の糧とする者達が現れる。

魔物を倒すとその魔物の存在力が経験値として倒した者へと流れ込み、より強靭な肉体へと変化していく。迷宮の外の世界でも微弱ながら存在する現象ではあるが、ダンジョン内ではそれが顕著に現れるのだ。

また、稀にダンジョン内で発見される魔導具は強力な力を帯びており、そのどれもが国宝級と言つて良い程の物である。

その為、各國は挙つて自国内により多くのダンジョンを取り込もうと戦争を起こしたが、凡そ100年前にその戦争は鎮静化していつた。

大戦の鎮静化の理由の一つは迷宮国家ミーミルの誕生である。

世界最大の迷宮、ミーミルを拠点とするローダー達は属国入りを拒み、ギルド国家、ミーミルを建国したのだ。

世界最大のダンジョン、ミーミルを拠点とするローダー達は、周

囲を囲む4ヶ国からの侵略を防ぎ、押し返す事でどの国の傘下にも入らず、独自の国家を形成するにあたつた。それが大陸中を騒がせた世界大戦を終結した要因の一つともなつてゐる。

それから100年。5ヶ国は相互不可侵条約を結び、大陸には平穏な生活が戻りつつあつた。

ギルド国家ミーミル。

その名の通りミーミルと呼ばれるダンジョンに挑むローダー達を中心としたギルド国家ではあるが、『力が欲しければミーミルへ行け』という言葉がある通り、ギルド国家ミーミルには日夜多くのローダー志願者が集つてゐる。

そんな人達の中に、彼、レンジ・アシュレーの姿はあつた。真紅の色で短く切り揃えられた髪の毛、おでこから生えた2本の角が彼を鬼人族だと示してゐる。

「……がミーミルか

入国審査を待ちながらレンジはミーミルの外装を見やる。見えるのは非常に高くそびえ立ち、外界とミーミルを分断する壁である。

「流石にデカい……噂通りだな。」

ミーミルでは入国時に1000ジーを納めるだけで入国出来るが、その代わり出国の際には莫大な税金を納めなければならない。

これはミーミルで身に付けた力や魔導具が簡単に外界に流失するのを防ぐ為と、徵税により国の財政を潤す為である。その為、ミーミルの外壁は非常に高く作られているのだ。

「次の者入つて来い。」

レンジの番が回ってきた。町唯一の入り口に作られた天幕の中にいると、質素なテーブルと椅子に座った門番がいるだけだった。門番の青年は事務的に作業を進めていく。

「」の紙に名前と年齢の記入しろ。」

言われるがまま用紙に『レンジ・アシュレー』と書き込み、ふとレンジはペンを止めた。

「どうした？」

「俺は生まれが分からんんだ。自分の歳が分からない。分かるのは名前だけなんだが？」

「そうか。そうさなあ……17、8つて所だな。」

他にも自分の年齢が分からない人がいるのか、門番の青年はそれで構わないと言つてきた。レンジは迷わず18歳と用紙に記入した。

「それじゃあ入国料の1000ジーを納めてもらおうか。」

レンジは財布の中から10枚の銅貨を差し出す。

1ジー＝10ジーは紙幣、100ジーからは銅貨となる。
銅貨100枚で銀貨一枚分に相当し、銀貨100枚で金貨一枚に相当する。

「確かに、1000ジー受け取った。ええと、レンジか。お前もローダーになりに来たのか？」

「一応はそのつもりです。」

「なら天幕を出て道なりに真っ直ぐ進むんだな。そうしたら赤煉瓦の建物が見えてくる。そこがローダーズギルドだ。ダンジョンに入るにはギルドに登録しないと入れないからな。」

「分かった。ありがとう。」

レンジは入国料に更に数枚の銅貨を上乗せして手渡した。その行動に門番の青年は驚いた。

戦争が終結したこのご時世、普通ローダーになろうなんて人は、大抵が普通の暮らしを捨ててきた者達が殆どだ。数少ないまともな連中もミーミルでの生活に心ここに在らずといった状態になるのが普通である。

しかし、レンジからほそのような雰囲気は感じられないのだ。

「無理して死に急ぐなよ。」

驚いたレンジは門番に振り返る。口にした門番の青年も自分の発言に驚いているようだ。

「……大丈夫。そう簡単には死はないさ。」

後ろ手に手を振りながら、レンジは天幕を出た。

ローダーを取り纏めるローダーズギルド第2支部は、赤煉瓦作りの洋風な建物だった。ギルドを見付けたレンジは迷う事無く中へと入る。中はレンジが思っていたよりも人気^{ひとけ}があり、全身を鎧で武装した者や魔術師なのかローブを着込んだ者で溢れていた。彼等は大体が能力鑑定と書かれたカウンターや換金と書かれたカウンターに並んでいるか、飲食が出来るスペースにてエールで祝杯を上げている。

レンジはそれを横目に新規登録受付のカウンターへと足を運んだ。

「ん、いらっしゃい。新規登録の方ですね？」

閑職なのか受付嬢は煎餅を頬張つていたが、レンジを見るとお茶

で一気に流し込み仕事を始めた。

「ええっと、お名前は？それとギルドに登録する1000ジーーはある？」

少し砕けた口調の受付嬢に、レンジは少し面食らった。ギルドの制服に身を纏つた受付嬢は16、7といった所か。褐色の肌を持ち、流れるように銀髪をポーテールで結んでいる。その尖った耳からエルフだという事が見て取れる。胸にはネームプレートがあり、『ネル・アベル』と書かれていた。

ジイツと見詰めるレンジの視線を受け、ネルは少し呆れた視線で返した。

「ダークエルフがそんなに珍しい？」

「……御免。」

自分の不作法に気付き、素直に謝ったレンジに門番同様少し驚く
ネル。

「ま、まあ私は慣れているからいいんだけどさ。君、気を付けた方がいいよ？一応ミニミルは多人種国家だし、血の氣の多い奴等ばつかだからね。君だって鬼人だから分かるでしょ？」

素直に謝ったレンジに対し、余計かなとも思える注意をしてしまうネル。

確かにここミーミルに辿り着くまでに、鬼人というだけで蔑まれる事もあったな、とレンジは思い出し、再び謝るのだった。

「もう良いわ。仕事しましょ~!~君、名前は?」

「レンジ・アシュレーです。」

「ふむふむ……」

幾つかの質問を繰り返し、ネルはローダー登録書にレンジの名前、出身地、外見的特徴を書き込んでいく。

「よしそ、それで? レンジ君はレベル幾つなの?」

「レベル?」

「そ、レベル。クラスチョンジとか聞いた事無い?」

「……見て分からぬかな?」

レンジの格好は腰に差している刀以外は至って普通の服装である。そのまま漁師としても通用しそうな出で立ちだ。

ネルは頷くと同時にちょっとした肩透かしを味わった。ギルドの受付嬢をし始めて5年以上経つが、レンジは歴戦の強者には見えなかつたが、同時にただの漁師にも見えなかつたのだ。

「そうね、鑑定してみれば分かるわ。」

そう言つてネルはカウンターの下から水晶を取り出した。それは宝石をいくつかあしらつた魔導具であり、感応珠と呼ばれる特殊な石を仕組んである測定器である。

「この水晶に触れてみて？」

レンジは言われた通りに水晶に触れる。ピリピリと掌に伝わる物があった。

「ん~、外から来た割には結構レベル高いわね。レベルは?。クラスは戦士（ソルジャー）、属性は……闇!？」

「何か不都合でもありますか?」

「……いや、中々見慣れない属性だったからつい、ね。もう離しても良いわよ。」

再び言われた通り手を離す。

「後少し頑張ればロークラスにクラスチェンジ出来るわよ。頑張つてね。」

ネルの励ましの言葉にも小首を傾げるレンジ。傭兵やそこいらの子どもですら知っている常識をまるで知らないのだ。

「後はレンジ君専用の指輪を作るだけだから、椅子に座つて少し待つてね。」

そう告げるとネルは受付から奥へと入つていった。

書類を登録し、指輪を作成中にネルはふとレンジの方を見やり、溜め息を吐いた。どう考へてもここミーミルでは長生き出来るタイプには見えない。レンジ専用の指輪も無駄になりそうな予感がする。

「今日は随分と田舎者が来たようね。」

「何だサラサか。指輪は出来たの？」

「出来たわよ、はい。」

獣人で赤毛の同僚から指輪を受け取るネル。サラサは眼鏡の奥からカウンター越しにレンジを見やつた。

「食い詰めた漁師つて感じ？直ぐにおつ死んじゃいそう。」

「ん~、でもちょっとは見所あるかもよ？」

「へえ~、ネルのお眼鏡にかなつたわけだ。」

「そういうんじゃないんだけどね。何て言うか女の直感？」

「はいはい。まあ無事に最初の1週間を越えられると良いわね。」

新人のローダーにとつて最初の1週間は1番最初の山場である。迷宮でどれだけ活躍出来るかはここにかかっていると言つても過言

では無いのだ。

指輪を手にしたネルは再びカウンターへと戻つていった。

ギルドから指輪を受け取り、幾つかの注意事項を説明された後、建物から出たレンジは次の行き先について悩んでいた。ダンジョンに入つても良いが、先ずは拠点となる宿屋を探した方が良いのではないだろうか。

そう判断したレンジはギルドから貰つた町の地図が載つたパンフレットを広げた。文字が読み書き出来ない人の為か、分かりやすく絵が書いてあつた。

地図の通りに町を歩く。すると宿屋通りに出た。後は懐事情と相談して宿を決めるだけだ。

「……ここにするか。」

『若葉亭』と書かれた看板は年季が入つており、ローダーは1週間で1400ジーと手頃な金額。レンジは早速その酒場兼宿屋へと入つた。

「いらっしゃい！宿泊かい？」

現れたのは恰幅の良い女将だった。

「はい。1週間泊れますか?」

指に嵌めた指輪を見せながらレンジは問う。

「はいよ、前金で1400ジーだ。」

銅貨を14枚先払いすると部屋へと案内される。宛がわれた部屋は2階の角部屋だった。

「朝食と夕食はウチで出すから、腹が減つたら下りてくるんだね。分かりました。」

部屋に入り荷物の整理を終えると、早速ダンジョンに入る事にした。

宿屋を後にし、町の中央にあるダンジョンへと続く門、通称神魔の門へと向かう。

どういう仕組みかは判明されていないが、ギルドから渡された指輪を通じて神魔の門には個人を認証する力があり、一度通り着いた階層なら10階単位で一気に潜れるそうだ。まあ初挑戦だから自ずと1階からになるが。

扉を開くと階段が現れる。これが深淵なるダンジョンへの第1歩かと思い、武者震いするレンジであった。

腰に差していた刀を抜き、1歩1歩階段を下りていく。その度に冷たい空気が濃ゆくなつていくようだ。

ダンジョン内は見慣れない光る岩苔のお陰で視界は良好である。レンジはこれなら戦闘にも問題は無いと判断する。

階段が途切れた。いよいよ深淵なるダンジョン、ミーミルの地下1階に到達したという事だろうか。刀を振り回すには少し手狭な通路を経て、レンジは最初の部屋に辿り着いた。

「これは……」

視界に飛び込んで来たのは一面に広がつた糸と、それに絡まり白骨化した先人の成れの果てだった。

「この糸は……ワームか。」

ワームとは昆虫類に属する魔物で、糸を吐いて獲物を捕え捕食する事で有名だ。

しかし逆を言えば糸さえ気を付けていれば、動きは鈍重で他に攻撃手段を持たない魔物だと言える。

「つー」

己の勘を信じ、その場から一気に横つ飛びする。すると今まで立っていた場所に多量の糸が降り注いでいた。

「上かつ！」

ダンジョンの天井を見上げると一匹のワームが天井からぶら下がり、こちらに向かつて糸を吐き出していた。

「ちつ！」

レンジは勢い良く駆け出し、その場から離れ糸を避ける。駆け出した勢いをそのままに、壁を利用して三角飛びでワームに迫る。刀を片手で振り回し横一閃、ワームを両断し床に着地する。ワームは光の粒子へと変化し焼き消えていった。

すると、熱いシャワーを浴びたかのような感覚が体を通り抜ける。これが魔物の存在力を経験値として吸収したという証拠だ。外の世界よりも顕著なそれは、何処か心地好い物であつた。

キン

ワームを倒した所で床に珠が転がっている事に気付いた。これがギルドで説明された宝珠というやつだろう。これを地上に持ち帰れ

ばギルドで換金して貰える。それがローダーの主な収入となるのだ。
回収において損は無いだろ？。

「最初に現れる魔物がワームか……」

ワームはダンジョンの外でも見掛けるランクの低い魔物だ。糸に
さえ気を付ければ倒すのは簡単である。
どうやらこのダンジョンの中の魔物も外の世界と似たような生態
系を成しているようだ。

「これなら多少は前へ進めそうだな。」

仮にもハーミルに辿り着くまで冒険者として旅して来た経験が役
に立ちそうだ、と、少し安堵するレンジであった。

宝珠を拾い腰にぶら下げた魔導具、『次元袋』へと入れる。次元
袋とは、その名の通り魔術で次元を歪ませ、袋の中を拡張した物で
ある。いくらでも収納が可能であり、重さも変わらない、冒険者に
とっては必須のアイテムなのだ。

「さて、先に進むか。」

たかが1階の魔物を1匹倒したぐらいで感傷に耽っている場合で
はない。このダンジョンは最下層すら存在しないと言われている、

深淵なるダンジョンなのだから。

再び通路を進み出したレンジは細心の注意を払いながらダンジョンの奥深くへと入つて行つた。

最初の戦闘を合わせて7度、ワームを掃討した所で階下へと続く階段を発見した。レンジは迷う事無く階段を下りていく。

2階へとやつて来た。周りの雰囲気は1階とそう変わらない。光る岩苔の明りが辺りを照らすだけだ。

「さて……」

通路の先からは此方からも見える程の糸の幕が確認出来る。この階の魔物もワームと見て間違いないだろう。

標的が分かれればまだまだ対応が取れる。刀を下段に構えると、一気に通路の先にある部屋へと突っ込んだ。

「はあっー！」

床を這つていたワームに斬りかかる。糸を吐き出せせる顎を引く

すに一刀両断の下に斬り倒す。一撃で致命傷となつたようで、キイントと宝珠を残してワームは光の粒子となつて焼き消えた。宝珠を回収して次元袋に入れると、また先へと進む。今の所それの繰り返しだ。

暫く歩いていると、後ろから何かが近付いて来る気配がした。

「……まさかなあ。」

武器である刀は通常よりやや長めであるため、狭い通路では気軽に振り回せないので。こんな場所で魔物とエンカウント等していられない。

「くわっ…」

レンジは一気に走り出し田の前の部屋に飛び込んだ。

「くわっ…」

飛び込んだ先の部屋にもワームが蠢いていた。後ろからやつて来るであろう魔物に対しても準備を行う為にも、レンジは一気にその部屋にいたワームを片付ける。壁を利用して今のレンジに出来る限りの速度で一気に詰め寄り、ワームが糸を吐き出す前に両断していく。天井からぶら下がっていたワームを片付けた所で、通路の方から更

にワームが現れた。

「ちつ！」

その数は1匹だが、既にレンジへとターゲットを確定しているのか、室内に入るとワームは直ぐに糸を吐き出して来た。左右に動きながらその糸を避けるとレンジは攻撃を再開した。まだ1匹ずつを相手にするならどうにかなる。糸に注意を払いながらワームを倒していく。

そうして動き回る事数十秒、ワームを倒した。

「ふう……今のはそれなりに危なかつた、かな？」

下手に通路で戦闘を開始していたら、刀の威力を殺しながらの戦いになつていただろう。糸を通路目一杯に吐き出されたら動きは止められていたかも知れない。それを考えると通路での戦闘は選択しないで正解だつただろう。

落ちている宝珠を回収しながらレンジは1人ごちた。

「さて、と。」

軽い休息を挟んでレンジは再びダンジョンの奥深くへと歩みを進める。到達目標としている階は別に無いが、今の状態で行ける所まで行ってみる予定だ。

刀を握り締め、レンジは次なる敵との遭遇に注意しながら先へと進む。まだまだ2階という事もあり、レンジはある程度の余裕を持ちながらワームを掃討していった。

一体何れ程のワームを倒したのだろうか。どう數えても3桁近くは倒しちゃう。今も室内に残っていた最後のワームに止めを刺しあばかりである。

ダンジョンの地下8階へと到達したレンジは、飽きる程にワームとの戦闘を繰り返していた。

そろそろ腹の具合的にも地上に戻った方が良いだろう。そう判断し、次に階下へと下りる階段を見付けたら、その隣にある地上に通じる門を選ぶ事にした。

相変わらず若干手狭な通路を進んで行くとそれは見付かった。直ぐ様蠢いているワームを討伐し宝珠を拾う。ワームとの戦闘にもかなり慣れてきた所だ。これなら次に来る時も体は反応出来るだろう。念のため、やり残した事は無いかと一応確認する。

この階でエンカウントしたワームは全て倒したし、宝珠も全て回収した。

「……大丈夫かな？」

まあ初めてのダンジョン入りだし、こんなもんだろ？と判断したレンジは地上への扉を開いた。

地上に戻つて来たレンジは軽く伸びをした。今までの緊張感がゆっくりとほどけていく。辺りはそろそろ夜の町へと変わりつつある。それだけダンジョンに籠つていたのかと思うと、ちょっととした達成感が湧き出でくる。

ぐう～

少しばかり感傷に浸つていると間抜けな腹の音がした。

「わざと済ませて宿に戻るか……」

ダンジョンから戻つてやるべき事は一つだけ。宝珠の換金である。レンジは足をギルドへと向けて歩き出した。

ギルド内は相変わらず人気が多く、飲み食い出来るスペースでは多くのローダー達が酒を酌み交わしていた。

そんな彼等をよそに、レンジは換金のカウンターへと並ぶ。この時間帯が1番込み合うのか、カウンターは3つ設けられており、そのどの列にも多くのローダー達が並んでいた。

レンジもその中へと入つていく。

ゆっくりとだが、確実に1人、また1人と捌けていき、やっとレンジの番が回ってきた。

「それではここの中に宝珠を入れてください。」

指定されたケースにダンジョンで拾った宝珠を入れていく。途中からあまりの多さに面倒になつたが、1個ずつ確実にケースの中へと吸い込ませていった。

「……はい、只今計算しますね。」

受付嬢は何やら力チャカチャとキー ボードを打つしていく。

「……宝珠って何に使われるんですか？」

「はい？ああ、初めての方ですね？」

「はい。」

「宝珠は魔物の生命力の塊です。私達ギルドではその塊からエネルギーを抽出して町の維持に勤めているんですよ。町の外灯等のインフラに始まり、属性付きの宝珠等は使用者に販売したりしています。」

「使用者？」

「はい。商人、ギルド等を通じて各家庭等にエネルギーの供給を行っているんです。」

つまり宝珠はここノーミルでの生活基盤を支える役割を果たしているのかと納得するレンジ。

「はい、計算が終わりました。今回の宝珠は4430ジーで買取りさせて頂きます。お財布カードはお持ちですか？」

「財布カード?」

「はい。ローダーをやつしていくと収入と支出がどうしても多くなります。それだけの硬貨を持ち歩くよりも、カードなら入金していくだけで資金を手軽に持ち歩けるようになるんです。町中の殆んどの施設でお使い出来ますよ。発行に2000ジー掛かりますが、発行致しますか?」

「はい、じゃあそれでお願いします。」

「畏まりました。」

財布カードなる物の存在を今知ったレンジは直ぐ様頷く。これで今日の稼ぎの約半分は消えてしまつたが、使えるアイテムを手に入れる事が出来たのなら安いもんだろ?と考える。

「はい、こちらがお財布カードになりますね。只今は2430ジー一入金されております。」

財布カードを受け取ったレンジはそれを懐に収め列を離れる。やるべき事はこれで終わりだ。後は宿屋に戻つて晩飯を食べるだけ。レンジは軽く急ぎ足で宿屋へと戻つた。

宿屋に着くと丁度カウンタークローケを掃除していた女将に出会った。

「お、帰つて來たね。迷宮初挑戦は無事に済んだのかい？」

「はい。お陰さまで何とか。」

「そうちかいそうちかい。まあ客が無事ならそれでいいさね。帰らなく
なつたローダーの後処理程面倒な物は無いからね。食事にするかい
？」

「はい、お願ひします。」

「はいよ。椅子に座つて待つてな。」

勧められるまま食堂の椅子に腰掛けて、料理が運ばれて来るのを
待つ。すると器用に幾つもの皿を持つて女将はやって来た。

「注文があればそれでいいけど、今日はアタシのお薦め品だ。一杯
食べて力を付けるんだね。」

そう言つて並べられていく料理の数々にレンジは食べきれるか不
安になつた。

「残してもいいから腹一杯食べなー！」

顔に出ていたのだろうか、女将はレンジを見ながらアッハッハと
笑つた。

「それじゃあ……いただきます。」

取り敢えず食えるだけ食おうとしたかったレンジは早速料理に手を付けた。

「ん、美味しいです。」

「お、そう言って貰えると料理人冥利に尽きるね。」

お世辞でも何でもなく、素直に美味しいと思える料理だった。一番の理由は空腹だったからかも知れないが、それでもレンジには美味しく感じられた。

「いらっしゃいました、美味かったです。」

気付けば女将が持ってきた料理は全て完食していた。

「はいよ。」

笑顔で皿を下げる女将に一礼し、レンジはあてがわれている自室に戻った。

「食つたなあ……」

あれだけの量を食いきれるとは自分でも思っていなかつたレンジは、満たされた腹を擦りながら腰から刀を抜き、外しひツドに横たわつた。

「何か疲れたな……」

ミーミルにやつて来て初日、今日1日で色々な出来事が起つた。特別悪い事じゃないのが救いだらうか。

また明日もダンジョンに入る為、刀のメンテナンスを済ませるとレンジは早々に睡眠を取る事にした。

EXPOO2（後書き）

ジニーの価格は、1ジニーが10円くらいだと計算してください。

前日早めに就寝したレンジは、まだ夜が明けまる前に田を覚ました。

階下の共同風呂を使い軽く汗を流し、食堂の方へと顔を出す。

「おや、早いじゃないか。もう田が覚めたのかい。」

そこには前日と変わらぬ女将の姿があった。昨夜も遅くまで食堂で働いていた筈だ。一体いつ寝てているのだろうか？

「朝食なら少し待つてくれるかい？」

「それならもう少ししてから下りてきます。」

取り分け急いでいる訳でもないレンジは、自室に戻り刀を腰に差した。まだ防具らしい防具を買い揃えていなかつたが、別段今の装備で問題があるわけでも無いのでそれで済ましているのが現実である。

装備を整え、洗濯物を籠に入れて部屋を出る。いつもしておけば昼間の内に宿屋側が洗濯を済ませてくれるのだ。

出掛けの準備を整え、再び食堂へと足を運ぶ。丁度そのタイミングで朝飯が運ばれて来た。朝から結構なボリュームのステーキ、それとスープとパンにサラダ。

「ローダーなら力が付く食事を取らないとねー。」

そんなもんのかとレンジは一人納得し、早速料理に手を付けた。

「そう言えば、アンタ晝飯はどうしてるんだい？」

今日は一日中ダンジョンに籠るつもりでいたレンジは答えに悩む。

「ウチから弁当を作る事も可能だよ？まあ一食分50ジーー掛かるがね。」

「じゃあそれでお願いします。」

「はーよー。」

弁当を頼んだ後は朝飯に視線を戻す。先ずは田の前の食事から片付けようと肉を切り口に運んでいった。

弁当を女将から受け取り次元袋に収納する。

「よし。」

準備は完了だ。後はダンジョンに入るだけである。まだ完璧に目覚めていない町中を歩き、神魔の門へとやって来た。
今日の目標は10階以上への到達である。最低でも10階、そんな気分で門を潜つた。

相変わらず階段を下りる毎に、ダンジョン特有のヒンヤリとした空気に身を包まれる。それがレンジの神経を鋭くさせていく。ダンジョンに入つて直ぐ様レンジは駆け出した。別に後ろから魔物の気配がした訳でもない。ただ、一度辿り着いた5階までは魔物を無視し、ノンストップで突き進む為である。

全ての部屋をスルーし、順調に階下へと進むレンジ。ワームの方も一気に現れて一気に立ち去つていくレンジを敵と確認する暇も無く、順調に2階、3階と階を重ねていった。

「……ふう。」

5階まで一度も戦闘を行わず、一気に進んできたレンジは、6階へと続く階段を前にして軽く息を整え腰の刀を抜いた。ここから先はワームが同時に複数匹現れ、油断の出来ない階層だ。レンジはより一層神経を尖らせて階段を下りて行つた。

暫く道を進んでいると、部屋に辿り着いた。中は魔物、ワームで溢れ返つていたが、レンジは迷う事無く近くにいたワームから掃討

を始めた。存在力を吸収する感覚にも慣れてきたし、何より前日に100匹以上倒してきた魔物である。物の数分でワームの掃除は終わった。

「こんな物か……」

レンジは少し物足りなさを感じていたが、まだまだダンジョンの前半中の前半である。これから事を考えて、『氣を引き締めて前へと進んだ。

6階、7階と階を増やしていく頃には、ワームがどう現れようと動じなくなつた。勿論一度に現れるワームの数は増えているが、1匹1匹の戦闘力が変わる訳でもない為、現れるワームは全てレンジに倒され、宝珠へと姿を変えた。

「はあ……」

ダンジョンの中に入つてずっと動きっぱなしだったレンジは、刀を鞘に仕舞い、ダンジョンの壁に寄り掛かり、一時の休憩を挟んだ。魔物の存在力を吸収しているお陰か、思つてはいるより肉体的な疲労感は無い。強いて言つのなら、張り詰めた緊張感から精神的に疲労を感じているだけだ。それをほんの少しだけ和らげる。

「……ダンジョンに入つて結構な数を倒してきたけど、本当に強くなつてるのかな？」

比較対象となる魔物は、今の所ワームしかいない。しかし、ワームは最初から楽に倒せる魔物であった為、これでは比べようがないのだ。

「これなら田標の10階到達は楽に達成出来そうだな。」

今いるのが7階だ。後3階潜れば、次に来る時は一気に10階から開始する事が出来る。

寄り掛かっていた壁から身を剥がし、再び刀を抜くと、次なる魔物、次なる階を求めてレンジはダンジョンの奥へと歩み進めた。

漸く10階までやって來た。

レンジは今まで以上に神経を研ぎ澄ませ、ダンジョンの中を進んでいく。開けた部屋に出た。ワームの姿は無い。やっとワームの出る階層から次の階層へと辿り着いたのだ。

「キキキッ」

「つー」

突然頭上から鳴き声が聞こえたと思ったら、鋭い爪が目の前に現れた。間一髪それを避けたレンジは爪の持ち主を確認した。

「ジャイアントバット！」

外の世界でも、主に洞窟などに生息する魔物の一種である。常に暗闇の中で行動する為、口から超音波を発生させ、その反響を感じ取り獲物を確認するのだ。

「ちつ！」

ヒラヒラと舞うように飛ぶその姿を捕えるには少しばかり苦労する。何せ目は退化しているが、超音波を使った動きにはキレがある。普通に刀を奮つても、ヒラヒラと避けられるのが関の山だ。より速く、レンジはその一点に集中し、ジャイアントバットへと詰め寄った。

「破つ！」

体の勢いそのままに奮った刀はジャイアントバットを捕え、一振りでその体を両断した。

「……力が上がってるな。」

ジャイアントバットから経験値を吸収しながら確認する。

以前ジャイアントバットと戦った時は自分の奥の手を駆使して何とか勝利していた。だが、今のレンジは奥の手に頼らなくとも地力でジャイアントバットを倒せるだけの力が身に付いている。ワームを倒してきたのが無駄骨じゃなかつたと実感出来る瞬間だった。

「よしー。」

力が上がっているという実感は、レンジのやる気を上昇させた。例え小さな魔物でも、コツコツと地道に倒して行けば、それは確実な力となる事が実感出来たのだ。

宝珠を拾い次元袋に仕舞い、レンジは次の部屋を田指して足を進めた。

10階から先はジャイアントバットが主な魔物のようで、時たまワームがいたりもしたがジャイアントバットに補食されたりしていた。

そんなグロテスクな場面でもレンジは動じる事無く対処に当たる。ワームの時よりも確実に攻撃が当たるよう、速度を重視し、ジャイアントバットを討伐していく。

11階、12階と、順調に階下へと進んで行つたレンジは、周囲に魔物がない事を確認すると、13階への階段を前にして休息を取りつた。

次元袋から宿屋の女将特製の弁当を取り出し昼飯を食べる。ダンジョン内では時間が分からない為、完璧に腹時計での昼飯だ。

今日の昼飯はサンドイッチだった。何の肉かは分からないが、肉汁たっぷりの肉と、シャキシャキと程好い食感の野菜、またそれを挟んだパンが程よくマッチしており、50ジーー分以上に満足出来る昼飯だった。

「うわあ、うと。」

サンディッチを包んでいた布を次元袋に仕舞い込み、刀を引き抜く。

第2幕の始まりだ。

「よしおー！」

レンジは勢い良く13階への階段を下つていった。

13階で現れる魔物は、勿論ジャイアントバットだ。ヒラヒラと舞うように飛ぶジャイアントバットに対し、速度重視の攻撃を喰らわせる。

こうして地道でも魔物を狩つていけば、確実に力が身に付く事が証明している。レンジは嬉々としてジャイアントバットに攻撃を加えていった。

14階、15階、16階と順調に進み、気付けば17階への階段を下りる所まで来ていた。

「腹の具合的には、もう少しで夕飯の時間、かな？」

次の階への階段を見付けたら、今日はもう地上へ戻るつと決めたレンジは、刀を構えながらダンジョンを進んでいった。

「ん~つ、疲れたなあ。」

無事にダンジョンから帰還したレンジは軽く背伸びをして体中の緊張感を緩和させていった。

太陽が沈み始め、町は夕暮れ時のオレンジ色に染まつつある。

「さて、換金に行くか。」

ローダーズギルドへと向かって歩き出すレンジ。今日は結構な収入になつただろうと思いながら道を歩いて行く。

ギルドの中は相変わらず人で溢れ返っていた。換金のカウンターも長蛇の列を作っている。まあ仕方の無い事だと割りきり、レンジも列に並ぶ。さて、今日はどれだけの収入になつたのだろうと考え

ながら順番を待つ。次第に人が捌けて行き、漸く順番が回ってきた。

「はい、こちらのケースに宝珠を入れて下さいね。」

次元袋から宝珠を取り出し、どんどんケースに吸わせていく。面倒な作業だが、これが収入に直結しているので文句は言えない。やがて全ての宝珠を吸い込ませ、レンジは計算を待つた。

「……はい、合計で7420ジーですね。」

思っていた以上の収入に満足しながら財布カードに入金してもらう。これで所持金は9000ジーを超えた。今の宿屋ならこれ以上ダンジョンに入らなくても2ヶ月近くも泊まれる金額だ。ホクホク顔でギルドを後にしたレンジは、真っ直ぐに宿屋へと戻った。

宿屋では女将がクローケの掃除をしていた。本当に一体いつ寝ているのだろうか？

「おや、おかえり。食事にするかい？」

「はい。適当に見繕つて下さい。」

「はいよ、カウンターに座つて待つてな。」

この宿屋、若葉亭は食事に関しては当たりだと判断したレンジはお任せで注文した。

やがて女将が大量の晩飯を運んで来た。

「しつかり食べなよ！」

相変わらず量が多い。宿代は安く、出される料理も質が良くて量も多い。文句は何一つ無い。早速料理に手を付ける。

「うん、美味しい。」

「当たり前さ。このアタシが作ったんだからね。」

カウンター越しに二三回としながら返事をする女将。

「そう言えば、昼飯、じつそつとまでした。」

次元袋から昼飯を包んでいた袋を取り出す。

「はいよ、お粗末さま。」

女将に袋を渡し、再び食事に手を付けていった。

自室に戻ると朝洗濯に出していた服が綺麗に折り畳められ、テーブルの上に置いてあつた。刀を外しベッドに横たわる。

「ふう……」

心地好い疲労感と満腹感で直ぐにも寝れそうだ。しかしそまだやるべき事がある。上半身だけ起き上がり刀へと手を伸ばした。鞘から抜き取つた刀身は歯零れ等無く、まるで新品のように輝いている。それでも手入れは欠かせないものだ。手入れと言つても乾いた布で汚れを拭き取る程度だが、錆びないよう綺麗に磨いていった。

「……よし。」

磨いた刀を光に翳しながら満足する。いつからだつたかは定かではないが、物心付いた時には既にこの刀はレンジの傍にあつた。それ以来ずっと使い続けているが、今まで一度も歯零れもした事の無いこの刀は、今や完全にレンジの相棒である。

大事に磨き終わつたら鞘に仕舞う。これで明日の準備も完了だ。

やるべき事を終えたら再びベッドに横たわる。暫くゴロゴロしていると睡魔がやって来た。レンジはそれに身を委ねて瞼を閉じた。

レンジがミーミルにひせて来て3日目の朝が来た。いつものように早めに目覚めたレンジは、シャワーを浴びて脳を活動させていく。シャワーが終わると部屋に戻り刀を腰に差して階下の食堂へと顔を出す。

「今日も早いねえ！」

そう言つて朝飯を運んでくる女将に挨拶をして食事を始める。相変わらず朝からボリュームたっぷりだ。

ステーキを切り分けながら食べていく。今日もこの宿の朝飯は美味しいもんだ。

「今日も弁当作るかい？」

「お願いします。」

「はいよつ。」

朝飯を食べている間に昼飯を作つていく女将。朝飯を食べ終わると昼飯用の弁当を手渡された。それを次元袋に仕舞い、今日も1日が始まる。

神魔の門へとやつて来たレンジ、前日の奮闘のお陰で今日からは一気に10階からのスタートが出来る。

「10階へ。」

迷わずに10階へと告げる。すると指輪がキラリと光り、門は開いた。現れたのはいつもより若干長い階段だ。それを1歩ずつ確實に下りていく。

階段が途切れた。10階への到達である。

「今日は20階を目標にしてみるか。」

最低でも前日の17階を超えると心に決め、レンジはダンジョンの中を進んでいった。

「キキキッ！」

小部屋に入ると早速ジャイアントバットが出迎えてきた。爪を刀で防ぎ弾き飛ばす。ジャイアントバットはヒラヒラと舞うように飛び、壁への衝突を避ける。しかしそこまでは予想済みだったレンジは、一気に詰め寄ると唐竹割りに刀を振る。今までコツコツと溜めてきた経験値のお陰もあって、その速度はジャイアントバットの反応を超えるスピードであった。

一刀両断したレンジは経験値の吸収を感じ取りながら宝珠を拾つた。

「よしぃ。」

今日も順調な滑り出しである。

レンジは満足げに頷くと次の部屋へと足を進めた。

既に17階迄の到達経験があるレンジにとって、それまでの階は準備運動に近かつた。ジャイアントバットに地力で勝っているという事も大きいだろう。レンジは11階、12階と順調に階数を重ねていこう、16階まで一気に下りていった。

「さて、ここからだ。」

前日の経験からすると、ジャイアントバットが一度に複数匹現れる。統率が取れていかない為、対応自体は楽に出来るが、下手をすると防戦一方に追い込まれる。それだけに気を配ればまだまだ余裕のある階だ。

「キキツー。」

早速現れたジャイアントバットの爪を受け止め、小部屋内へと気を配る。もう1匹は部屋の片隅に佇んでいた。それならば問題は無い。先ずはこの1匹を処理して、その次にもう1匹と対峙するだけだ。

ジャイアントバットを弾き飛ばし、体勢を立て直す前に斬り倒す。経験値を吸収しもう1匹の方へと近寄つて行く。

「キキキキッ…」

一定の距離を越えるとジャイアントバットは羽を広げて飛び掛かって来た。

「破つ…」

今度はこちらから先手を打つ。距離を詰め、刀を振り回す。すると爪に当たったのか、ギインと音がしてジャイアントバットは体勢を崩した。その隙を逃す筈もなく、一気に勝負を付ける為更に詰め寄りジャイアントバットを両断する。

やがて経験値が流れ込んできた。

「まあこんなもんか。」

宝珠を拾い一人ごちる。前日よりも若干倒しやすく感じるのは、その分存在力を吸収している証だろう。確実に力が身に付いているのをその身で実感しながら、レンジはダンジョンの更に奥へと進んでいった。

ダンジョンの19階。今日の目標に掲げていた20階への到達を目前にして、レンジは宿屋の女将特製の昼飯を食べていた。今日の昼飯はオニギリと唐揚げ、それに漬け物だ。

ポリポリと漬け物を食べながら、レンジはこれから行動を考えていた。目の前の階段を下りれば、今日の目標に掲げていた20階到達は果たす事が出来る。だが調子良く進んでいる今、20階で今日のダンジョン入りを終了するのは如何な物か？

「……30階まで粘つてみるか。」

目標の再設定を行うと、両頬をパンツと叩き合ひを入れる。弁当を包んでいた布を仕舞い、その場から立ち上がる。軽く柔軟をすると20階への階段を下りていった。

更に一段と冷氣のような物が増し、レンジの神経を過敏にさせる。20階からの魔物が何なのか想像が付かないが、恐らくは新手の魔物だろうと推測したレンジは、いつでも攻撃、または防御が出来るように戸を下段に構えながら通路を進んでいく。

小部屋に辿り着いた。辺りを見回してみると魔物の気配は感じられない。まあそんな事もあるだろうと次の通路へと足を進める。その時だった。

通路の先から魔物が雄叫びを上げながら飛び出して來た。

狭い通路での戦闘を避ける為、レンジはバツクステップを繰り返しながら先程の小部屋へと戻つた。小部屋内の明かりに照らされて、現れた魔物が判明する。

身の丈は人の半分程だが筋骨隆々な体、手には武器を持ち、緑色の肌をした、所謂ゴブリンがそこに立つていた。

「h m p a w a w !」

「何を喋つてゐるのか分かんねえよ！」

外の世界ではゴブリンは集団で現れる。だが今の所目の前の1匹以外が現れる気配は無い。これもダンジョンだからなのかと1人納得しながら、レンジはゴブリンと対峙した。

ゴブリンは武器を扱うだけの知能はある。しかしそれは武器を使うというだけで、使いこなせる事とは別だ。脳筋のか力任せに武器を奮うだけの単純な攻撃しかしてこない。それが1匹。単純な攻撃のやり取りでも、力負けしなければ苦労はしないだろうと予測し、レンジはゴブリン目掛けて刀を振り下ろした。

ギインツ！

ゴブリンは持つていた手斧でレンジの攻撃を防ぐ。先ずは力比べといった所か、鍔迫り合いになつた。渾身の力を込めて刀を振り下ろすレンジと、それを迎え撃つゴブリン。力比べは互角といった所

か。

それならば速度はどうだらうか。

速さ重視の戦い方に切り換え、縦横無尽に刀を振り回す。ギインツ！ギインツ！と何度も防がれたが、切り傷を作る事には成功した。しかし致命傷と呼べるには程遠い傷だ。

「もつと剣だけで行けると思つてたけど……仕方無いか。背に腹は変えられん。」

どちらかを取ればどちらかが欠ける。そんな拮抗した戦いになるといつ事は、今のレンジの力がゴブリン一匹と同等という事なのだろ。勿論地力のみで戦つた場合での話だが。

「ふう……発眼！」

一旦距離を取つたレンジは己の奥の手である異能の力、『鬼眼』を発動させた。力が溢れ出し、レンジの体の隅々まで広がっていく。見開かれたレンジの瞳はいつもの金色ではなく、彼の髪の色と同じく、赤く燃える炎の色をしていた。

ダンツ！レンジが踏み出した速度は先程の比ではなく、まるで風を身に纏つたかのような速度であった。

「疾つ！」

その速度に追い付けず、防御すら出来なかつたゴブリンは首をはねられ宝珠へと姿を変えた。

「つとと、こんなもんか。」

刀だけでは拮抗した戦いも、奥の手を使えばまだまだ余裕が出てくる。となると、この階からは奥の手、異能の力、鬼眼を使用しながら戦つた方が確実に決着を付けられるか。

そう悟つたレンジは宝珠を拾つて次元袋に仕舞い、先へと進んで行つた。

ゴブリンへの対処法を見出だしたレンジは、時折休憩を挟みながら順調に階を重ねていつた。現れるゴブリン達はそれぞれ違つた武器を持っていたが、鬼眼の力で身体能力をブーストさせたレンジはその変化にも対応してみせた。

鈍器を持つたゴブリンの体を断ち、弓矢を持つたゴブリンの首を飛ばし、気付けば26階まで辿り着いていた。

「そろそろかな？」

そもそも「ゴブリンが一度に複数匹現れても不思議ではない階層だ。

「ヒュン！」

「エーリヤー！」

「やっぱり来たか！」

通路の先にあった小部屋に入ると予想通り2匹のゴブリンがいた。

「発眼！」

2匹ならまだ対処出来るはず。

そう考えたレンジは早速異能の力を叩き起^レこす。身体能力をブーストさせ、近くにいたゴブリンをターゲットに詰め寄った。

「破つ！」

一振りで首と胴を斬り離し、続いてもう1匹に詰め寄る。迎撃の準備が出来ていたゴブリンだが、勢いに乗った一撃に剣を弾き飛ばされ体勢を崩す。その隙を逃す事無くレンジは刀を振り抜く。物の数秒の出来事だった。

レンジは宝珠を拾いながら呼吸を整えていた。

「ふう……やつぱりまだまだだな。」

レンジは出来るなり異能の力に頼らず、単純に剣だけで倒せるのがベストだと考える。異能の力に頼らず、剣のみで倒せるなら異能の力は奥の手として取つておけるからだ。

「ゴブリンと戦い始めて存在力もそれなりに吸収して来たが、剣だけで対抗するのはまだ早いだろう。

「暫くは20階からが稼ぎ所になるな。」

次の階へと進みたい気持ちはあるが、無理してまで進みたいかどうかと聞かれれば否である。順調に進むためにも、確実な力を身に付けてからないと。

そうと決まつたら後は行動するだけだ。レンジは次なる魔物を探してダンジョンの中をさ迷い歩いた。

異能の力を駆使しながらレンジはゴブリンを倒し、ダンジョンの中を進んでいく。勿論宝珠を拾う事も忘れずに。27階、28階とダンジョンのより深くへと進んでいくレンジ。29階に至つては、同時に6匹のゴブリンを相手に奮闘を重ねた。

「はあはあ……漸く30階か。」

30階へと続く階段を前にして、レンジは大きく深呼吸をした。今までの経験上、恐らく30階からは新手の魔物が現れる。しか

も鬼眼を使用してじゃないと戦えない相手だろう。それを覚悟の上でレンジは30階へと足を進めた。

コツコツとレンジの足音だけがダンジョン内に響く。しかし、流れれる空氣はどこか緊迫感を漂わせる物がある。

通路が途切れ小部屋に辿り着いた。魔物の姿は見えない。しかし、部屋の中にはいるだけで何処からか視線のような物を感じ取れる。

「……何処だ？」

辺りを見回しながら部屋の中央に辿り着いた瞬間だつた。四方八方から骨が飛んで来て魔物の形を成していった。

「スケルトンか！」

スケルトンとは骨のみで形成された体を持つ魔物である。目の前に出来上がった奴は槍を使うようだ。

「ちつ！」

レンジの武器が長めの刀とは言え、槍に比べたらリーチにそれなりの差がある。それに今のレンジは鬼眼発動での連戦の疲労も蓄積されている。長引けば長引く程レンジにとって不利な物になる。それを悟ったレンジは鬼眼を使い、一気に勝負を決めに行つた。

「発眼！」

ゴブリンの時と同様に一気に畳み掛けるレンジ。しかし、目の前のスケルトンはその速度にも対応し、槍でレンジの攻撃を捌く。その上一瞬の隙を狙つて反撃までしてきた。

「くっ！」

鬼眼発動状態の速度について来られると思つていなかつたレンジは、一転して防戦一方に回された。

ギィンッ！

刀を弾かれて一旦距離を取るレンジ。まさか30階のレベルがここまでとは思つていなかつた為、後手に回りっぱなしだ。

「……変に拘つて死ぬわけにはいかない、か。」

ふう、と一呼吸入れ、レンジは両手に集中した。それを受けてか、スケルトンも動きを止め、此方の様子を伺う構えを見せた。

「鬼眼呪縛！」

レンジの異能の力というのは、何も身体能力をブーストさせるだけではない。寧ろ身体能力のブーストは異能発動状態時の副産物だ。鬼眼本来の力は別にある。

それは千里眼とも呼ばれる全てを見透かす力である。

相手の動きや力の向き、力量。それら全てを見透かし対応する。

それが鬼眼の本来の力である。

『鬼眼呪縛』とは、その名の通り鬼眼による金縛りみたいな物だ。鬼眼を見開き、睨み付けた対象を無条件で金縛り状態に陥らせる、鬼眼の能力その1である。

『鬼眼呪縛』に掛かったスケルトンは、ジタバタと両足両腕を動かそうともがくが、そう簡単に呪縛が解ける訳もなく、ただただ隙だらけの体を揺らすだけだった。

勿論レンジがその隙を逃す筈もなく、一気に距離を詰めるとスケルトンを一刀の下に両断した。

「ふう……やつと一匹か。」

変に拘りを持たず、鬼眼を使用してやつと一匹倒せるレベル、それが今の自分の力量だとレンジは推測する。

「これは少しの油断も出来ないな。」

元々そんなに油断はしていなかつたが、改めて気を引き締めようと再確認するレンジであった。

レンジはその後7回の戦闘を経て、漸く地上への階段を発見した。

「暫くはこいら辺の階層で経験を積むか。」

また明日、20階からダンジョンに潜り戦闘を重ねようとした決め、地上への階段を上つて行った。

「ん~つー! 疲れたなあ……」

伸びをしながら宝珠の換金をしに行く。久々に鬼眼を使ってまでの戦闘に疲労感を感じながらギルドの中へと入る。3日目ともなると人混みにも大分慣れてきた。

順番を待ち、自分の番が回つてきたら宝珠をケースに吸わせていく。今日の収入は1万ジーーを超えて1万と6472ジーーだった。懐が温かくなつたレンジだが、今の所使い道は無い。装備を整えるにしても、まだまだ今の服装 チュニックにズボン だけでまだまだいける。まあいつかは整える事になるだろうと予測しながら

ら宿屋へと戻つた。

相変わらずボリュームたっぷりの晩飯を食べ、愛剣の手入れをしてベッドに入る。疲れが溜まっていたのかレンジは直ぐ様夢の中へと誘われた。

EXP004（後書き）

ランギングが上がり、何やらポイントが上昇しております。こんなに拙い文章を評価して下さつてありがとうございます。ありがとうございます。

皆様の感想・評価がとても励みになります。

レンジがダンジョンに挑戦し始めて5日が過ぎた。

今日も4日目、5日目と同様に、20階からスタートしゴブリンを倒していく。1匹だけを相手にするなら剣術だけで何とかなるようになつて来たが、数を相手にする時は、まだまだ異能の力、鬼眼に頼らざるをえない。

それでも確実に力を付けている事が実感出来る為、レンジは頑なにゴブリンやスケルトンを掃討し続けた。その数は合計すると軽く3桁を超えている。

今日も20階からダンジョンに入り35階で地上に戻つて来た。確実に力を付けているのが実感出来る為、レンジは毎日ダンジョンに籠つていたのだ。

「ふう～、さて、換金換金つと。」

稼ぐ額はまだまだ少ないが、塵も積もればなんとやら、レンジの財布カードには5万ジニー近く入つている。今の宿屋なら4ヶ月程は何もしなくとも泊まれる金額だ。

「いらっしゃいませ。換金ですね?」こちらへびつば。

受付嬢の言つがまま宝珠をケースに吸い込ませていく。後は金額が出るのを待つだけだ。

「……はい、一万七千五百ジニーになります。」

今日も稼いだなあ、と一人ごちるレンジ。財布カードに入金を済ませると真っ直ぐに宿へと向かった。

「おう、お疲れさん。」

女将がいつものように迎えて来る。一体いつ休んでいるのだろうか？

「飯にするかい？」

「はい、お願ひします。」

「はいよー。」

自室に戻る前に食堂に寄る。そこでは既に晩飯を食べたりエールで酒盛りしているローダー達がいた。

彼等の邪魔にならないようにカウンターに座ると晩飯が運ばれて来るのを待った。

「はいよーお待ちどうつさねー。」

今日の献立はパンにコーンスープ、鳥の唐揚げだった。

「いただきます。」

先ずは唐揚げを一口。ジュー・シーな味が口の中に広がる。パンも固くなくふつくらとしている。コーンスープも一口飲むと、コーンの粒々がしつかりと味を主張してくれる。

「ん、美味しい。」

美味しさに釣られて食は進む。気付けば大盛りに感じた晩飯をあつといつ間に完食していた。

「じゃあいつをまでした。」

「はいよー。」

皿を下げる女将を前に皿室に戻る。レンジは刀を外しベッドにダイブする。

「ふう～、食つた食つた。」

「そのまま睡眠に移りたい所だが、寝る前の儀式化となつていてる刀

の手入れをする。勿論布で磨くだけだが、それだけで輝きを取り戻す刀に満足すると、今度こそ睡魔に身を任せた。

レンジがミーミルに来てから7日目。今日は朝からダンジョンに入る事も無く、ゆっくりとした寝起きだった。

いつも通りに朝風呂に入り頭を覚醒させ、女将が作つた朝食に舌鼓を打つ。それから部屋に戻り腰に刀を装備すると、レンジは部屋を後にした。

「ん~っ! もう1週間か……」

宿屋を出て軽く伸びをする。

そう、レンジがミーミルに来てからもう1週間が経つのだ。レンジ本人としては、早かった、と感じる1週間であった。それだけ中身が充実していたのだ。

「さて、行くか……」

今日向かう先はダンジョンへ続く神魔の門ではなく、ローダーズ

ギルドである。

ローダーは週に1回、ギルドに顔を出し、生存確認を行う義務があるのだ。まあ生存確認以外にも色々と確認する事項はあるのだが、基本は生存確認が主である。

「相変わらず混んでるな。」

ギルドへと到着したレンジの感想は、いつも通りの物だった。朝から各カウンターにはローダー達が列を成している。彼等も恐らくは生存確認をしに来ているのだろう。『鑑定・証明』と書かれたカウンターに並ぶ。自分の番が回ってくるのを待つていると、自ずと他のローダー達が目に入ってくる。全身を甲冑で覆った者やロープを羽織っている者、実際に様々なローダーがいるのが見て取れる。

「次の方どうぞ。」

自分の番が回ってきた事に気付いたレンジはカウンターへと歩み寄る。

「あら？ 貴方は確か……」

そこにはレンジがローダー登録する時に対応した受付嬢、ネル・アベル嬢がいた。

「やっぱり1週間は生き延びてこれたみたいですね。」

「1週間に何かあるんですか？」

「50人に1人。新人口ーダーが最初の1週間生き延びる確率と言われているわ。外の魔物とダンジョン内の魔物の違いに着いていけなくて、大体のローダーは命を落としているのよ。」

50人に1人。そんな確率まであるのかと1人感心するレンジであつたが、後ろが突っ掛えている。やるべき事をせつぞと済ませることにした。

「はい、この水晶に触れてくださいね？」

ローダー登録の際にも使用された水晶に手を触れる。

「さて、レンジさんはレベルを幾つまで上げてきたのかな？」

水晶から弾き出される数値に期待を持つて、ネルは画面を覗き込んでいた。

「レベルは……？？！？」

「そんなに驚く事なんですか？」

「だってレンジさんはまだ1週間しか経っていないんですよ！？それなのにこのレベルなんて、一体ダンジョンで何があつたんですか

！？」

「ん～、これと書いて特別な事は何も。強いて言えば毎日ダンジョンに潜つていたぐらいですかね。」

「毎日ダンジョンに潜つていたんですか！？」

「……何か不味かったですか？」

「はあ……良いですか？普通ダンジョンに入るには大体1日置きくらいで入るもんです。魔物の存在力を経験値として吸収して、それが体に馴染むまでにはそれなりの時間が掛かるんですよ？」

「でも、俺はそんなに苦では無かったですから。」

「……何と言うか、規格外ですね。」

溜め息を吐かれる理由がピンと来ない。規格外と言われてもピンと来ないレンジは、事の成り行きを見守るしか出来なかつた。

「兎に角、レンジさん。ロークラスへとクラスチェンジ出来ますがどうしますか？」

「ロークラス？」

「はい。ソルジャー戦士からレベルファイタで拳士ナイトに、レベルマジシャンで魔術士に、レベ

ル？？で騎士ナイトへとクラスチェンジ、所謂転生が出来るんです。レンジさんは？？ですのでファイターへと転生出来ますが、……どうなされますか？」

「各クラスにメリットとかはあるんですね？」

「そうですね、一般的なローダーの方々は無難なファイターへと転生しますね。ローカラスから上のミドルクラスへのクラスチェンジも1番早いですし、更にハイクラスも多々ありますからね。マジシャンはその名の通り魔術に秀でた能力が開花します。多種多様な魔術を駆使するマジシャンの火力は目を見張る物があります。ナイトはローカラスでも最強と言える肉体を手に入れる事が出来ます。ま

た、闘氣という力に目覚める事が出来ますね。」

「そうですか……それなら俺はナイトを目指そうと思います。」

「そんなに簡単に決めて良いんですか？ナイトはミドルクラス、果てはハイクラスへの転生が他のクラスよりもかなり厳しいですし、それに一度クラスを決定したら他のクラスに変更は出来ませんよ？」

「構いません。俺はナイトを目指します。」

「……分かりました。それでは今日は見送らせて頂きますね。」

そう言って力チャ力チャとキーボードを操作するネル嬢。

「それでは登録情報を更新しますので、指環をお借りしますね？」
「分かりました。」

指環を外しネルへと手渡すレンジ。ネルはそれを受け取ると素早く情報を書き込んでいった。

「はい、出来ましたよ。」

物の数分で指環の更新は終了した。レンジはそれを再び左手の人差し指に嵌める。

「それではまた1週間後にいらして下さいね？」
「分かりました。」

カウンターを後にし、そのままギルドから出たレンジ。今日は丸々休息日と決めていた為、やる事はもう終わってしまった。

「開拓する畠があるわけでも無いしなあ…………」

ミーミルの町は石板が敷かれているし、それに個人で土地を持っている訳でもない。このまま宿に戻つてもいいが、それでは味気が無さすぎる。

「……色々見て回らうかな？」

ミーミルに来てからはダンジョンと宿を往復する毎日を送つてきた。たまには市場を見て回るのも良いかも知れない。

「何か掘り出し物でも見付かるといいな。」

多少の期待を膨らませ、レンジは出店が多く連なっている通りへと足を運んだ。

「安いよ安いよーーー！アトの串焼き、3本で50ジーーだ！」

「マルツ鳥の唐揚げだ！さあ買った買った！」

「Hントンの塩焼きーーー！皿30ジーーだよーーー！」

流石に商業区は出店が多い。しかも活気に満ち溢れている。何か食べながらでも歩こーうかと思つたレンジは、派手に客引きをしていく出店に顔を出した。

「それ一つ下さい。」

「はいよ、いらっしゃいーーー！アトの串焼きだね、50ジーーだ。」

財布カードで支払いを済ませ、再び喧騒の中へと歩き出す。行儀は良くないが、取り敢えず歩きながらアトの串焼き一本を口に運ぶ。

「ん、美味しい。」

アトとは4本足の獣だが、よく食事にも出でくる食材だ。多くはミーミルの外に生息している為、商人がよく運んでくる食材でもある。その串焼き。甘辛いタレが絶妙にマッチして何本でも食べられそうだ。

「ん、そうだ、そろそろ装備を整えなきや。」

ダンジョンに入つてまだ怪我らしい怪我は負つていないが、これから先の事を考えると防具の1つや2つは揃えておいた方が良いだろ。トトの串焼きを頬張りながらレンジは田目的の防具屋を探した。出店通りを抜け、暫く歩く。すると剣と盾が描かれた看板が見付かった。

『ガウルの金槌』と書かれた店名。恐らく装備全般を扱っているのだろう。レンジは迷う事無く扉を開けた。

「いらっしゃい。」

出迎えてくれたのはドワーフ族の爺さんだった。

「坊主、何を探してるんだ?」

「防具が欲しいです。資金は5万ジニー以内でお願いします。」

「5万か……それならレザー装備になるな。」

そう言つて店内から幾つかのレザー装備を取り出して来る爺さん。単にレザー装備と言つても幾つか種類があるようだ。

「オススメはこっちのハードレザー装備だな。伸縮性もあるし何より防刃仕様だ。」

「着てみてもいいですか？」

「ああ、好きにしな。」

許可を貰い早速ハードレザー装備を身に付けていく。メイルに袖を通しレギンスを履き、そして腕を覆うグローブを嵌めていく。

「どうだ？自由に動けるか？」

軽く柔軟をしたり飛び跳ねたり、防具が動きの邪魔をしないか確認する。

「……問題は無いみたいですね。」

「そうか。それに決めるか？」

「はい。いくらですか？」

「4万5千ジー、と言いたい所だが、見たところ坊主はルーキーのようだしな。大まけにまけて4万ジーでどうだ？」

「買います！」

田舎でだつた防具が5000ジーも安く買えるとあって、レンジはハードレザー装備の購入を決めた。

カードで支払いを済ませるとそのまま店を出る。荷物になるくらいなら装備を着込んで歩いた方がマシだと想い、レンジは宿屋までハードレザー装備を着込んで帰った。

あの後、いくつかの屋台を見て回りながら宿屋に戻ったレンジ。宿屋に着くと女将ではなく他の従業員がカウンターに座っていた。何でもローダーが仕事に出掛ける毎間に女将は休憩を取っているらしい。

一つ謎が解けたなと思うながら、レンジは宿屋の宿泊延長を告げ、1400ジーーを前払いした。

自室に戻り装備を脱ぎベッドに入る。

「ん~つーたまにはこんな休日があつてもいいかなあ……

ダンジョンに入らずただただゆったりと過ごす、そんな一日がまたダンジョンに入る英気を養っていくのが分かる。

「週に1日、鑑定を受ける日はのみのんびり過ごすか。」

これからープラン立てながら、レンジは晩飯の時間までゆっくり寛いでいた。

EXPO06（前書き）

戦闘描[かたわら]はやつぱつ書[か]く難[むず]いです。さうせんたら上[じょう]達[たつ]するかなー？

翌日、いつものように朝の準備を整えたレンジは、これまたいつものようにダンジョンへと潜つていた。階層もいつも通り20階からだ。ゴブリンを相手にレンジは今日も奮闘し続けていた。

「破あつー。」

レンジの力量は2匹のゴブリンを相手に、異能の力無しで対抗出来るくらいには伸びていた。それ以上になるとどうしても鬼眼の力に頼らざるをえないが、それでも確実に力を付けているのを肌で実感していた。

「流石にこれだけ戦い続けていれば、それなりの力は身に付くか。」

これまでにゴブリンだけでも軽く3桁以上は倒してきている。これで力が上がらなかつたら多分嫌気が差していただろづ。

「よしぃー。」

次の階層、28階はもつとゴブリンが湧く階だ。鬼眼を駆使して掃討する予定で階段を下りていった。

「nhdok!」

「bhjpw!」

「ehwak!」

相変わらず通じない言語で喋っているゴブリン達。レンジはその中に打って出た。途端に視線はレンジに集まる。

「hapti-hapti!」

どうやら敵と認定されたようだ。ゴブリン達が各自の武器を手にし此方へと突進してくる。レンジは刀を上段に構え鬼眼を発動させる。

「疾つ！」

レンジは、ゴブリンの集団の隙間を縫いつゝに移動する。移動しながら刀を奮い、「ゴブリンの首をはねていぐ。紫色の血飛沫が舞う、その数3匹。丁度半分の数である。残った3匹に対しても油断する事無く確実に討伐していく。

「鬼眼を使えば難無く倒せる、か。まだまだだな。」

剣の腕を磨きたいレンジにとって、ここいらの階層は絶好の訓練場だ。実力が拮抗しているからこそ腕が磨けるのだ。

「やつぱつこりこりで腕を磨くのが一番だな。」

どうしたら腕を磨けるか？

出た答えは焦らずにじっくり進んでいく、だった。それが力を、技を身に付ける一番の近道だらう。

そう思い起こしダンジョンの更に奥へと歩き出した。

ダンジョン内をも迷つていると再びゴブリンの群れに遭遇した。

「発眼ー。」

即座に鬼眼を発動させ、ゴブリンには追い付けない速度で攻撃を与えていく。1匹、また1匹と事切れていくゴブリン達。気付けば残り1匹まで数は減つていた。

「ふう……来いよ。鬼眼無しで戦つてやるから。」

全身に張り巡らせていた氣を一度拡散させ、鬼眼を解除する。体の感覚がいつもの肉体へと戻つていく。

「…………」

「何言つてゐるか分かんねえって……」

別にゴブリンの言語を理解しようとは思わない。お互い命を奪い合つ存在だし、そこに会話等無意味な物なのだから。

「疾つ……」

「こん棒を振り上げたゴブリンの胴体に刀を一閃。その一瞬でゴブリンは事切れた。今やそれだけの実力差がレンジと単体のゴブリンにはあつた。

「筋力もスピードも上がつてゐな……」

「いつした若干とは言え成長が感じられるから頑張れるのだらつ。レンジは嬉々として宝珠を拾い集めた。

「よし、次行くか。」

全ての宝珠を拾い集めたレンジはまた歩き出す。まだまだダンジョンは始まつたばかりだ。こんな所でつまづいてなどいられない。レンジはダンジョンのより深くへと潜つていつた。

レンジは30階に到達した。ここからはいよいよ余裕が無くなる。30階から現れるスケルトンは鬼眼発動で身体能力をブーストさせても互角の戦いになるのだ。

「それでも進まなきやならない、か。」

女将の手作り弁当を食べ終わると、レンジは軽く柔軟と屈伸をして気合いを入れ直した。刀を下段に構えながらダンジョンを進んでいく。暫く歩いていると小部屋へと到着した。部屋の中にはスケルトンが一人。早速鬼眼の力で身体能力をブーストさせる。

「ふう……」

まだスケルトンは此方に気付いていないようだ。奇襲を掛けるには丁度良い状況である。一気に部屋の中へ入るとスケルトン曰掛けで距離を詰める。気合いを込めて刀を一閃、捉えたと思った瞬間、後寸での所でスケルトンが此方に振り返り、剣で防御の構えを見せた。

ギインツ！

「やつ！流石にそう簡単にはいかないか。」

鎧迫り合いに縋れ込む。ギリギリと力で対抗するレンジ。どうやら力勝負は互角のようだ。

「これならどうだ！」

一気に脱力しスケルトンの刃を受け流す。レンジはその場で1回転し、がら空きだったスケルトンの脇腹に斬り込む。ガリッと音がして肋骨を3本程切り裂いた。

しかしスケルトンは何も無かつたかのように動き出す。

「くそつ！」

一旦距離を取りスケルトンの攻撃範囲から抜け出す。

「やつぱりまだ簡単には倒せないか。」

力勝負なら互角の戦いが出来るようだ。スピードも互角。ならばどうやつたらダメージらしいダメージを『えられるのか？』結論は今まで通り『鬼眼呪縛』の使用だつた。

「鬼眼呪縛！」

スケルトンの動きを封じ込めたのを確認すると、レンジは一気に勝負に打つて出た。

先ずは真っ正面から一撃、更に背後に回り込みながら一撃を与える。

ギインツ！ガリガリツ！

正面からの攻撃は微妙に防がれたが、風のような速度で背後に回り込んでの一撃には防御が間に合わなかつたようで、頭蓋骨に大きな傷を与える事が出来た。

それが決め手となつたのか、スケルトンは活動を停止した。

「……頭部が弱点なのか？」

今の戦いから学ぶ物はあつた。スケルトンの弱点さえ分かれば剣だけで対抗出来るかも知れない。

そのレンジの予測は2匹目のスケルトンで実証された。『鬼眼呪縛』で動きを止め、頭部のみを狙い刀を奮う。頭部に傷が出来たスケルトンはもがき苦しみ、頭部が破壊されると同時に、いつも簡単 に宝珠へと姿を変えた。

「よし。」

対抗手段が分かつたなら話は変わつてくる。頭部を狙い攻撃を仕掛けしていくだけだ。3匹目のスケルトンも頭部に狙いを定め攻撃を仕掛ける。ガリッ！ガリガリッ！と骨を切り裂いていくと、ダメージになつたのか、スケルトンの動きが目に見えて鈍くなつた。後は仕留めるだけである。

「収穫あり、だな。」

今日一番の情報をゲットしたレンジは、その後もスケルトンを相手に戦闘を続けた。

「この日、35階まで進んだレンジは、無理をせずに地上へと戻つた。

「えへー。やっぱ地上の空気が一番美味しいなあ。」

一気に緊張を解していくレンジ。伸びを繰り返しながらギルドへと向かった。

いつも通り込み合っているギルド内だったが、1週間も通つていれば慣れてくる物だ。換金の列に並ぶと自分の番が来るまでゆっくりと待つ事にした。

1人、また1人と捌けていき、レンジの番がやつて來た。

「あら？ 貴方は確か……」

「はい？」

そこには眼鏡を掛けた赤毛の獣人がいた。ネームプレートには『サラサ・ホルト』とある。

「貴方、ネルにギルド登録して貰わなかつた？」

「そうですけど、何か？」

「いや、何でも無いわ。ただ生き延びているんだなあつてね。」

50人中1人だつたか。

新人が最初の週を生き延びる確率を思い出すレンジ。そんな確率なら覚えていても不思議じやないのかも知れない。

「レンジ・アシュレーって言います。よろしくお願ひします。」「丁寧にどうも。アタシはサラサ・ホルト。サラサでいいわ。さて、

仕事しましょうか？

「はい。」

さつと差し出されたケースに宝珠を収納していく。手の掛かる作業だがこれが収入となる為、全ての宝珠を換金に回す。最後の1個を収納させると後は計算を待つのみだ。

「つと、結構稼いでいるのね。合計で2万と642ジーになるわ。

」

レンジは迷う事無くカードに入金する。装備を揃えて軽く金欠気味だった懷が、ほんの少しだが暖まった。

「それじゃあまたね。」

「はい。ありがとうございます。」

換金が終わればギルドに用はない。レンジはさつと宿へと戻った。

宿屋ではいつもの如く女将が出迎えしてくれた。

「「」苦労さん。飯にするかい？」

「はい。お願ひします。」

女将オススメで料理を頼むと、食堂内の椅子に座つて待つ。暫くして料理は運ばれてきた。今日はハンバーグステーキのようだ。

「いただきます。」

熱いものは熱い内に食べた方が美味しい。早速ナイフで一口大に切り分け口に放り込む。肉汁たっぷりのハンバーグステーキを頬張りながらバスケットからパンを取り、一口大に千切つて口の中へと放り込む。若干固めのパンだが、何度も咀嚼する事で唾液を吸い柔らかくなっていく。

「ん、美味しいです。」

「そうかい？何ならお代わりも作るうか？」

「いや、流石にそれは食いきれませんって。」

女将の中のローダー像はどれだけの大食漢なんだろうか？

兎も角、晩飯を満足しながら食し、腹が満たされたレンジは自室に戻った。

「ふう……」

ダンジョンの緊張感もここまで来れば完全に消える。腰から刀を抜き取り今日の手入れをする。それが終わると鞘に收めベッドに横

たわる。

今日はスケルトンに関して良い情報が手に入った。これからダ
ンジョン攻略には欠かせない情報が。また明日、ダンジョンに入る
時に役立つだろう。

そのまま瞼を閉じ満腹による満足感の中睡魔に身を委ねた。

一夜明けた。レンジはいつものように朝早くから活動していた。
シャワーで頭を覚醒させると朝食を取る。朝からボリューム満点
の食事を済ませると一旦部屋に戻りダンジョンに入る準備を整える。

「よしつー。」

刀を腰に差して部屋を出る。今日も体調は万全だ。一路神魔の門
へと歩き出した。

神魔の門前に到着すると門を潜る順番を待つ。まだまだ朝の早い
時間帯だ。そんなに待たずに順番が回ってきた。

「20階へ。」

指輪がキラリと光り、門が開かれる。門を潜ると階段が現れ、それを下りて行けば20階へと到達する。レンジは腰から刀を抜いて下段に構えると、階段を1段1段下りていった。

20階に到着した。先ずはいつものようにコブリン相手に体の慣らしから始めていく。

通路を歩いているとヒタヒタと足音が聞こえてきた。早速のHンカウントだ。現れたのは手斧を持ったゴブリンだった。

「ハケルー！」

相変わらず何を言っているのかは分からぬが、敵意がある事は確かだ。レンジも戦闘モードに意識を切り替える。

「ハケルー！」

手斧を大きく振りかぶって突進していくゴブリン。だがレンジの目に隠だらけにいる。

「疾つー！」

振りかぶった腕を断ち、更に胴体へと刀を奪う。紫色の血がダラダラと流れ落ち、ゴブリンはその場に倒れた。

「まだ息があるのか。」

宝珠へと姿を変えないゴブリンを見て少し驚く。だがそれも首をはねれば終了だ。経験値が流れ込み、ゴブリンは宝珠へと姿を変えていく。

「流石は魔物の生命力、って所か。」

再度一筋縄では行かないって事が分かり、更に気を引き締めるレンジであった。

ゴブリンを倒し進んでいく。そこに油断等は微塵も無い。一つ間違えれば命を落とす階層に、レンジは神経を研ぎ澄ませ、辺りへと気を配っていた。

小部屋に着いた。そこには槍を両手に持ったゴブリンだった。一気に距離を詰め、槍の間合いを潰し、鎧迫り合いに持ち込み力で押し込む。

「破つ！」

鎧迫り合いに負け、よろけた一瞬の隙を狙つて首をはねる。ゴブリンは宝珠へと姿を変えた。

「ふう……」

宝珠を拾い一息付く。今の戦闘は思っていた通りに事が進んだお陰で、そう疲労感は感じなかつた。だがダンジョンはこれからが本番だ。気合いを入れ直して先へと進んで行くレンジであつた。

順調に階層を積んでいったレンジは、26階へと到達した。

「よしつー。」

両頬をパシンと叩き再度気合を入れ直す。この階からはゴブリンが複数匹現れるのだ。少しの油断が命取りになる。辺りに注意しながら先へと歩んで行く。

運良く通路での戦闘は無く、通路の先、小部屋へと到着した。そこには手斧を持ったゴブリンとメイスを持ったゴブリンがいた。

「発眼ー。」

位置確認をし、迷う事無く鬼眼の力で身体能力をブーストをせる。風のような早さを身に纏い、ゴブリンの脇を通過しながら剣を奮つ。狙うのは首だ。

レンジが通り過ぎた後、ドサドサと倒れるゴブリンは、2匹とも首と胴体が別れていた。

「……まだまだだな。」

結果で言えば圧勝だが、それは鬼眼で身体能力をブーストさせ、スピードでじり押ししたからの結果だ。まだまだ剣のみで圧倒する力は身に付いていない。それを実感しているレンジは、いつかはこの階層を鬼眼無しで通過出来る事を目標に設定した。

辺りに注意をしながら通路を先へと進む。更なる戦闘を繰り返しながらレンジはダンジョン内をさ迷つた。

更に幾度かの戦闘を経て27階、28階をクリアしていくレンジは、29階へと到達していた。

「これで29階終了か……」

レンジの前には30階への階段と地上への扉がある。そこで一旦小休止を挟んだレンジは、昼飯を食べる事にした。今日の弁当はハンバーガー2個だ。つい先程まで戦闘をしていた場所での食事だが、空腹には逆らえない。辺りに注意を払いながらも黙々とハンバーガ

ーを口に運んでいった。

「ん、『じやくせき』までしたつと。」

なるべく早く昼飯を食い終わり、弁当箱を次元袋へと仕舞う。さて、ここからが問題だ。

30階から現れるスケルトンは頭部が弱点と分かつたものの、未だこれといった討伐方法は見出だせていない。鬼眼の力で身体能力の強化をしても互角に付いてくるスケルトン相手に、苦戦するのは目に見えている。

「……まあ鬼眼呪縛を使えば何とかなるか。」

レンジは再度気合を入れ直し、30階への階段を下りていった。

29階から30階へと、1階深く潜るだけでも辺りを包む雰囲気は微妙に変化する。視界の方は光る岩苔のお陰で良好だが、何と言つたらいいのか、常に辺りから殺氣のような物が肌身に突き刺さってくるのだ。レンジはそのピリピリとした感覚に合わせて神経を研ぎ澄ませていく。

力チャカチャと骨がぶつかる音がする。早速スケルトンにエンカウントしたようだ。

「発眼!」

迷う事無く鬼眼を発動させ、身体能力をブーストさせると田の前的小部屋に突っ込んだ。その先には両手剣で武装したスケルトンがいた。

「両手剣使いか。」

両手剣を扱うスケルトンは大体が大振りな戦い方をする。その一撃を喰らえば即致命傷になるだろうが、その分速度は少しだけ鈍る。そこを上手く利用すべく、レンジは小部屋の中を縦横無尽に走り回った。

速度について来れなくなつたスケルトンの頭蓋骨を狙つてのヒット＆アウェイ狙いだ。時折両手剣で防がれるも、頭蓋骨に確実にダメージを与えていく。

ガリガリと音を立てながら一際大きな傷を負わせると、スケルトンの動きもかなり鈍つてきた。最後の止めを指しにレンジはスケルトンの真後ろに回り込み、刀を一閃、振り切つた。ガリガリと頭蓋骨を破壊していくと、ガシャンと音を立ててスケルトンは行動を停止し崩れ落ちた。体を司る骨が光の粒子へとなり焼き消えていく。残つた物は宝珠だけとなつた。

宝珠を拾い次元袋へと仕舞うと、レンジは今の戦闘を振り返つた。速度重視の戦い方は相手を選ぶ。今のような少し鈍い相手ならそれで十分だが、小回りの利く剣や手斧を武器とする相手なら違う手法を取らなければならないだろう。

いよいよ鬼眼の力に本気で頼らざるをえない状況になつてきた。その事を意識しながら次の階を目指して先へと進んでいった。

次に現れたのは片手剣で武装したスケルトンだった。出会した瞬

間に鬼眼を発動させ斬り掛かっていく。しかしその速度に難無く着いてくるスケルトンに傷を負わす事が出来ない。

「……仕方無いか。」

本当は剣の腕を磨きたい所だが、変に拘つて死んだら意味が無い。レンジは一寸距離を取ると鬼眼に意識を集中させた。

「鬼眼呪縛！」

スケルトンの動きを止め、背後に回り込むと頭蓋骨に大きく斬撃を加える。それだけでスケルトンは事切れた。

「ふう、やつぱりまだこれに頼らないといけないな。」

鬼眼を使用する事自体は悪くない。寧ろ楽に倒せるようになるのだから、ダンジョンでは推奨される方法だろう。剣の腕を磨きたい所だが、レンジは惜しみ無く全力を出そうと決めた。

それから何度も戦闘を重ね、31階、32階と順調に進んでいったレンジは、33階を目前にして休憩を挟んだ。

「今日も35階で打ち止めかなあ……」

スケルトン一匹で手一杯な現状で、スケルトンが複数匹現れる36階以上に進むのは無茶と言えるだろう。鬼眼を使えば何とかなるかも知れないが、まだまだ続くダンジョンを考えると、更なる引き出しあまだ後に取つておくべきだらう。

そう結論付けたレンジは目標である35階を目指して再び歩み始めた。

「ん~っ！今日も疲れたあ~！」

予定通り35階から地上へと帰還したレンジは、伸びをしながらギルドへと向かっていた。ダンジョンを出たら、ギルドへ向かう。もはやそこまでが日常の一区切りとなつていた。

換金を済ませ宿屋に戻ると晩飯を食べ、自室に戻り刀の手入れをしてベッドに横になる。
いつもと同じ一日が今日も過ぎていった。

レンジがミニーミルに来てから10日目。

レンジは今日も朝からダンジョンに籠っていた。いつものように20階からダンジョンに潜り、35階まで探索し地上へと帰還する。まだまだ1日2日ではスケルトンを圧倒する事は無理なようで、地道に経験値を吸収し、力を身に付けていくしか道は無いようだ。

その成果として、ゴブリン相手に、2匹までなら鬼眼無しでも対抗出来るようになったのは嬉しい事だ。剣の腕も少しあは磨けているのだろう。

「さてとー。」

今日のダンジョン探索も終わり、後はいつものようにギルドで換金して今日の予定も終了だ。足早にギルドへ向かう。ギルド内はいつものように多くのローダーで溢れ返っていた。換金の列に並ぶ者、ギルドの食堂で祝杯を上げる者。様々なローダーが各自の理由でギルドに集まっていた。

レンジの用事は換金だけ。さつやと換金を済ませようと換金のカウンターの列に並び順番を待つ。

1人、また1人と順調に流れしていく。もつすぐレンジの番が回ってくる、そんな時だった。

いつも賑やかなギルドがシンと静まり返った。

「お、おい、あれって氷帝と炎帝じゃないか？」

レンジの後ろに並んでいたローダーが、ギルドの入り口を指差して口を開いた。レンジも釣られて、ギルドの入り口を見る。そこには赤い髪を逆立てた獣人と、青い髪を長く伸ばし後ろで纏めた獣人がいた。

「マジかよ、武闘会の有力者が揃っている所なんて初めて見たぞ！」
？」

武闘会というのは初耳だが、どうやら名人のようだ。

「む、混んでるな。」

「君が久しぶりにダンジョンに入るつと言つたんじやないか。第1支部じゃなくて第2支部に来たのも君の判断だ。これくらいの人混みは予想しちゃうなよ。」

何やら話しながら換金の列に並ぶ2人。辺りの注目など何一つ気にしていないうだ。

「次の方どうぞ。」

レンジの順番が回ってきた。辺りを賑わせている2人から意識を

切り替え換金の準備をする。

「はい、こちらに入れて下さいね。」

指示されたように宝珠をケースに収納していく。全ての宝珠をケースに仕舞うと、後は計算を待つだけだ。

「……はい、2万3250ジーーですね。」

カードに入金を済ませると列から離れる。そしてレンジの視線は再び件のローダー2人組に向かった。武闘会の有力者と言われていたが、どういう事なのかピンと来ないレンジは近くのローダーに話しがけた。

「あの2人ってそんなに有名なんですか？」

「何だ坊主、武闘会を見た事無いのか？」

「ミーミルに来てから間もないですし、何よりダンジョンにしか入つてませんから……」

「そうか。なら知らないのも無理は無いな。ミーミルでは月に一度武闘会が開かれるんだ。あの2人はその中でも上位に入る実力者なのさ。炎帝カルマと氷帝シユルト、この2人を知らない奴はないぐらいだ。」

「へえ、武闘会、ですか。」

「おっと、安易な気持ちで武闘会に参加するなよ？武闘会はダンジョンで磨かれたローダーの実力を披露する場所だ。死にはしない物

の、下手すると一生物の怪我をする事だつてあるからな。「なるほど。分かりました。」

2人についての情報が得られた事でレンジは納得がついた。要するに、ここミーミルでも指折りの実力者だといつ事だ。そんな2人の換金を皆が注目していた。

「……はい、202万4250ジーになります。お一人で分割しますか？」

「はい、それで頼みます。」

200万超えの換金という事もあってか、ギルド内にはおおおつ！と感嘆の叫びが起こった。

一体何れ程の階層まで潜ればそんな大金を手にする事が出来るのか？

どよめきの大半はそんな感情だろう。例に漏れずレンジもその金額に驚いていた。何せ自分が今日稼いだ金額の100倍もの収入だからだ。

「まあまあかな。よし、飯食いに行くか！」

そう言いながらギルドを後にしていく炎帝と氷帝。2人が去つていつた後は再び喧騒に包まれるギルド内であった。

「……俺も戻るか。」

腹も空いてきたし宿屋に戻れば晩飯の用意が出来ているだらう。
レンジはギルドを後にして宿屋へと戻った。

3日後、レンジは連日ダンジョンに入っていた。いつもと変わらず20階から潜り、30階を目前にして昼飯を食べる。
最早いつもの定番と化していた。

「明日は鑑定か……」

ミーミルに来てから2週間が経とうとしている。つまり2回目の鑑定の日が迫つてあり、ダンジョンに入るのを今日で一区切りだ。

「レベルは??に届いてるのかな?」

レベル??で目標のナイトへとクラスチェンジ出来る。しかしレベル??に届いていなかったら、また1週間待たないといけない。

「……今日は行ける所まで行ってみるか。」

いつもは35階で地上に戻るが、鑑定の事を考へると、今日は行ける所まで行ってみよう、やれるだけやってみよう」と田標を設定するレンジであった。

「そりと決まればさつさと先へ進むか。」

昼飯の弁当、最後の一 口を頬張ると、弁当箱を次元袋に仕舞い立ち上がる。田標はまだまだ遙か先だ。こんな所でゆっくりしている暇があるなら1階でも多くダンジョンを制覇してやろう、そんな気持ちでレンジは先へと足を進めた。

田標に設定したのは取り敢えず40階だ。それまでは何がなんでも到達してやろうと決意したレンジは、鬼眼の制限を取つ払つた。つまり剣の腕だけを磨くのではなく、全体の能力をアップさせる事にしたのだ。

まずはスケルトン1匹目、鬼眼呪縛でその機動力を奪う。それに成功すれば後は死角に回り込み頭蓋骨を破壊するのみだ。今の所これ以上の策が見出だせない為、自然とこの方法に頼らざるを得なかつた。

だが、効果は抜群で、スピードを失ったスケルトンはレンジの敵では無かつた。

次々に現れるスケルトンの軍勢を相手に、レンジは『鬼眼呪縛』のみでも十一分に対抗出来ていた。

「破つ！」

ガリガリと頭蓋骨を破壊していくと動きが鈍くなつていいく。そうなればレンジの敵ではない。更に頭蓋骨を破壊し討伐するだけだ。

「ふう、さて次へ進むか。」

順調にスケルトンを撃破していくレンジは更にダンジョンの深くへと進んでいく。31階、32階と進むにつれて遭遇するスケルトンも増えていく。だがまだ1匹ずつしか現れてはいない。まだまだ許容範囲内だ。

33階、34階と進んでいくと、遭遇するスケルトンの数も増えてきた。

「35階制覇、と。」

36階への階段と地上への扉を発見したレンジは大きく深呼吸した。ここから先は未知の領域である。複数のスケルトンを相手に自分がどれだけやれるのか、期待半分不安も半分といった所か。

「よしつー。」

気合いを入れ直すと36階への階段を下りていった。
刀を振り回すには少し手狭な通路を進んでいく。通路の先には小部屋があった。中を覗くと案の定スケルトンが2匹いた。

「発眼！」

気付かれていない内に鬼眼を発動させる。後は死角に回り込み頭蓋骨を破壊するだけだ。1匹目のスケルトンを鬼眼呪縛無しで撃破し、2匹目のスケルトンに意識を向ける。好都合な事にまだこちらには気付いていないようだ。背後に回り込み頭蓋骨を破壊していく。斬撃を浴びせていくとスケルトンは宝珠へと姿を変えた。

「ふう……何とかなりそうだな。」

上手く背後を突ければ複数のスケルトンも敵ではない事が分かった。1対1の状況が作れ、更にスケルトンの動きを封じ込められたなら負ける気がしない。複数のスケルトンも冷静に対処すれば思つていたよりも楽に倒せるようだ。

「よしつー先へ進むか！」

「この階層でもやつていける自信がついたレンジは、力強く先へと歩き出した。

「破つ！」

レンジはもうお馴染みの戦法でダンジョンの中を進んでいく。階層は39階まで到達していた。一度に現れるスケルトンの数も6匹を超えてきた。だが皆一様に、鬼眼呪縛にて動きを封じ込めると楽に倒せた。

しかし戦闘そのものがスムーズに行われたとしても数を重ねれば体力的にキツい物がある。

「ふうへへへ。」

レンジは大きく深呼吸して息を整えた。

39階に入つてから結構な数の戦闘をこなして来た。今日は今まで1番の収入になる事は間違いないだろつ。

「後はレベルが？？に届いてる事を祈るのみ、か。」

やるべき事はやった。後は40階の魔物を倒して地上に戻るだけである。

しかし40階層の魔物は何が現れるのか、皆目検討が付かない。スケルトンより強いのは確かなんだろうが、一体どんな魔物が現れるのだろうか？

まあ迷つてばかりもいられない。レンジは40階層への階段を下りていった。

40階へ辿り着いたレンジが先ず気になつたのは腐敗臭だった。39階までは無かつたこの腐敗臭にレンジは鼻を摘みたくなる。

「どんな魔物がいるんだよ……」

暫く通路を進んでいくと、ズルズルと衣擦れな音が聞こえてきた。
どうやらHンカウントしたようだ。

「発眼ー！」

取り敢えず鬼眼発動で速度を上げておく。後は敵によつて戦い方を選択するだけである。

通路の先、小部屋の中を伺つと、腐敗臭の理由が分かつた。

「「」の階層でグールか……」

グールとは腐った体をしている魔物だが、その強さは防御という概念が取つ払われているのか、攻撃力に秀でており、手にした武器を巧みに操る魔物である。

「「」の階層でグールか……確か体の何処かにある核を破壊すれば良いんだつたな。」

レンジは以前学んだ知識の中からグールの弱点を思い起こす。そして鬼眼によつてグールの核の位置を探し当てる。

「破あつ！」

レンジは一気に距離を詰めると、核を目掛けて袈裟斬りに刀を奮つた。

「オオオオ……」

僅かに核から狙いがズレ、グールはレンジを目掛けて剣による攻撃を仕掛けてきた。それを何とか受け流し、更に核を狙い攻撃の手を動かしていく。

「これでどうだつ！」

レンジはグールの核を狙い攻撃する。唐竹割りに切り裂いた攻撃は、何とかグールの核を破壊する事が出来た。

「オオオオ……」

グールの核を破壊すると、最後に呻き声を上げながらグールは崩れ落ちた。

「よし。」

宝珠を拾いながら今の戦闘を振り返る。グールの弱点である核を攻撃出来たのは鬼眼により核の位置を見透かしたお陰だ。まだまだ鬼眼無しでは到底敵いそうに無い敵との遭遇に、レンジは鬼眼を随時発動状態にした。

「全く……どこまで行つても油断出来ないな。」

勿論気の抜けた戦いをするつもりは無いが、それでも少しうし楽に倒せる方法があるはずだ。

「……剣の腕が上がれば問題は無い、か。」

とどいつまり、もつと実践を積んで強くなるしか方法は無いといふ事だ。

「やるしかないかっ！」

頬をピシャリと叩き気合いを再度注入し、レンジは再び40階を探索し始めた。

その後数回グールと戦闘を重ね、41階への階段を発見したレンジは迷う事無く地上への扉を選択した。目標である40階到達は果たしたし、これ以上の戦闘は体に無理を来すと判断したからだ。

「ん~つー・今日も疲れたなあ。」

伸びをしながらギルドへと向かう。後は換金をして宿に帰るだけ

だ。

いつものように換金の列に並び、順番が回ってくるのを待つ。暫く待つとレンジの順番が回ってきた。

「それでは宝珠をこのケースに収めて下さい。」

受付嬢の指示に従い、今日の収穫である宝珠をケースに収めていく。思っていたよりもその数は多く、面倒に感じながらもレンジは1個ずつキッチンとケースに収めていった。

「……はい、本日は4万と653ジーになります。」

過去最高の収入にレンジは満足しカードに入金する。

前日のようなイベントも無く、すんなりと換金が終わったレンジは真っ直ぐに宿屋へと戻った。宿屋に着くと早速晩飯を食べ、自室に戻る。

「明日は鑑定の日か……」

やるべき事はやり遂げたと思つ。後はレベルが??に届いているのを願うのみだ。

刀の手入れをしてベッドに横たわる。暫くすると睡魔がやつて来た。レンジはそっとそれに身を任せ、夢の中へと落ちていった。

EXPO'07（後書き）

いつも感想・評価して下さりありがとうございました。凄く励みになります。

EXP008（前書き）

ユニーク47000突破!
こんな拙い作品を読んで下せりゃあいつがヒーローじゃこまち。

夜が明けた。いつもよつよつとくじめな時間帯に起きたレンジは、いつものようにシャワーを浴びて頭を覚醒させる。それが終わったら今度は朝食だ。朝から巨大なステーキとボリューム満点の食事を済ませ、自室に戻り装備を整える。

「よしつ、行くか。」

今日の用事はギルドにて生存確認と鑑定だ。レベル??を超えている事を願いつつ、一路ギルドへと向かった。

朝だというのにギルド内は既に人気に溢れていた。中にはギルド内の飲食スペースで酒を飲んでいる人もいる。一体いつから飲んでいるのだろうか？

そんな事を考えながら『鑑定』のカウンターへと並ぶ。程無くしてレンジの番が回ってきた。

「やっぱまだ生き残っていましたね。」

受付係は例の如くネル嬢だった。

「さて、レンジさんは幾つまでレベルを上げてきたのかな？」
「どうですかね？ナイトにクラスチェンジ出来るレベル、??に届

いていふと良いんですが。「

カウンターに置かれている水晶に手を翳す。するとネル嬢が数値を読み上げた。

「ええとレベルは……？？？ですね。おめでとうございます、ナイトにクラスチェンジ出来ますよ？」

「よし…」

小さくガッツポーズをするレンジ。そんなレンジから指輪を受け取り情報を更新していくネル。

「さて、クラスチェンジしに行きましょうか。」

「ここで出来るんじやないんですか？」

「クラスチェンジは大聖堂で、ギルド職員立ち会いの下で行われるんです。今から準備して来ますのでギルドの入口で待っていて下さいね？」

「はい、分かりました。」

取り敢えず言われた通りにギルド入口にあるソファーに座りネル嬢の準備を待つ。

暫くするとネル嬢がバッグを抱いでやって來た。

「お待たせしました。さあ行きましょうか？」

大聖堂の場所が分からぬレンジは、ネルの後を追う形で大聖堂へと向かった。

神魔の門がある中央広場を抜けてギルドの丁度反対側、そこに大聖堂はあつた。そこは無人のようだが小綺麗に清掃されていた。

「大聖堂の管理もギルドの仕事の内なんですよ。」

顔に出ていたのか、ネル嬢がクスリと微笑みながらそう告げた。

「さて、ナイトへと転生しましょうか。心の準備が出来たら中央の椅子に座つて下さいね？」

心の準備は既に出来ている。後は転生の儀式を済ませるだけのレンジは直ぐ様椅子に腰掛けた。

「……それでは始めますね？」

背中に担いでいたバッグから何やら金板を取り出すネル。そしてその金板を床の窪みに嵌めた。

「汝、騎士ナイトの力を求める者よ……」

何処からともなく声が大聖堂内に広がった。

「汝はナイトの力を求めるか?」

「……求める。」

「今の体を生け贋にナイトの力を求めるか?」

「ああ、求める。」

「何の為ナイトの力を求める?」

「何の為?」

レンジは一瞬迷つたが、正直に思つてている事を口にした。

「俺が俺である為に。俺の自由を貫く為に、俺はナイトの力を求める!」

すると床一面に魔術陣が浮かび上がった。

「……それもまた真理なり。覚悟せよー汝はナイトへと生まれ変わ
るー」

魔術陣がレンジの中へと収束していく。その時だった。

「がつーー！」

レンジの体を激痛が走ったのだ。その激痛は収まる気配を見せない。という事はこの陣が体内に収りきるまるまでこの痛みに耐えなければならないという事だ。

「ぐう……つーーー」

体中を駆け抜ける激痛は止まるどころか更に増していく。あまりの痛みに椅子から立ち上がる事さえ出来ないレンジ。周りの魔術陣を見ると、激痛が治まるのはまだまだ気が遠くなる程先のようだ。

「ああああああああつーーー！」

「レンジさんつー！」

額に汗を滲ませながら痛みに耐えるレンジ。最早ネルにはそれを見守る事しか方法は無い。

「頑張つて下せーつー！」

必死に激痛に耐えるレンジに声援を送るネル。レンジはまだまだ続く痛みに気が狂いそうになっていた。自由を貫く事が何れ程キツ

い物なのか、それを肌身を持つて体験していた。

ナイトへの転生。

それはより強靭な肉体を得る為の儀式だ。文字通り筋繊維の1本1本からナイトに相応しい物へと変化する。果ては骨密度にまでその変化は及ぶ。それほどまでにナイトへの転生は激しい物であった。今のレンジに出来る事は、1秒でも早くこの激痛が治まるのを待つだけだった。

どれだけの時間が経つただろうか。1時間にも感じられるし、ほんの数分間の出来事のようにも感じられる。

レンジの中に魔術陣が完全に収束し終え、痛みが消え去った時、レンジは椅子からズレ落ちるように床に伏した。

「汝、ナイトの道を進む者よ。遙かな頂を目指すがよい。」

男性とも女性とも聞き取れる言葉が大聖堂内に響き渡り、転生の儀式は終了したようだ。床に倒れ込んでいるレンジは、自身の伸びた髪の間から辺りを見渡す。すると心配そうに近寄つて来るネルが見えた。

「レンジさん、大丈夫ですか？」

「痛う……何とか、生きてはいるみたいです……」

「ナイトへの転生は初めて見るんですが……相当地に酷しかったみたいですね。」

「発狂しかけましたよ……」

ネルに肩をかしてもらい、レンジは何とか立ち上がる。まだ痛みが痺れとして残っている体を動かしながら、レンジは自分の体の確認をした。

「希望通りナイトへと転生してみて、気分はどうですか？」

「まだ実感は湧かない、かな。でも体に痺れは残っているけど、何だか今までとは違う新しい別の力の鼓動を感じるよ。」

「そうですか。多分それがナイトが目覚める『闘氣』ってやつだと思いますよ。」

「これが、闘氣か。」

自分の体の中にある今までには無かつた新たな感覚、これが闘氣なのかも納得するレンジであった。

「さて、クラスチエングも終わりましたし、これからビリしますか？」

「ネルさんはギルドの仕事があるんじゃないんですか？」

「レンジさんのアフターケアって事で、今日の仕事は免除して貰つてますから。今日はこれから一日中フリーですよ。」

「そうですか……なら食事にしたいです。何か滅茶苦茶空腹なんですよね。」

「転生で体に溜まっていたエネルギーを使い果たしていますからね。ちょっと早いですがお昼にしましょうか。シチューの美味しい店があるんですよ。」

何処でもいいから鬼に角空腹を満たしたかったレンジは、取り敢えずネルに着いていく事にした。

宿屋通りを歩き進んでいくと一軒の建物の前でネルは立ち止まつた。

「着きましたよ。ここがオススメの食事処、『深海』です。」

何度もなく通っているのだろう。ネルは何食わぬ顔で店の中へと入つていった。

「おう、ネルちゃんじゃないか。1人かい？」

「こんにちは、ガトーさん。今日は新人口ーダーを連れて来ましたよ。ナイトにクラスチェンジしたばかりのレンジさんです。」

「レンジ・アシュレーです。」

「おうっ、俺はガトー・ベルゼだ。見ての通りこの店の主人をやつてる。気軽にガトーッて呼んでくれや。」

顔合わせが終了すると早速昼飯となつた。レンジは余程空腹だったのか、シチュー やパンを3人前程平らげてようやく落ち着いた。

「よく食べましたね。」

「空腹だつたからね。」

食後に紅茶を飲んでいると、ガトーが「デザート」とケーキを持つてきた。

「これはサービスだ。ネルちゃんがギルド職員以外の誰かを連れて来るなんざ初めての事だからな。レンジと言つたか、ネルちゃんの身請けでもするのか？」

「身請け？」

「ガトーさんっ！」

「何だ違つたのか？ギルド職員つて言つても、ここまでアフターケアしているから俺はてっきりそつなんだと思つたんだがな。」

そうか違つたか、と咳きながら再びカウンターの奥へと引っ込んで行くガトー。それを見送つた後、レンジの方から話を切り出した。

「身請け、つて何です？」

「……身請けはその名の通りギルド職員を買い取るシステムです。」

「ギルド職員を買い取る？」

「はい……職員つて言つても、早い話が私達はギルドに雇われている奴隸なんですね……」

「奴隸、ですか……」

「その身分を買い取る、つまりギルドの奴隸から解放して、買い取

つたローダーの奴隸となるのが身請けなんです。まあどうが良いとは一概には言えませんけどね。」

「成る程……ちなみにネルさんを買い取るにはいくら必要なんですか?」

「私の値段は500万ジニーです。」

「結構するんですね。」

「500万ジニーと言えば今のレンジのダンジョン100回分以上の金額だ。」

「ギルドの仕事に不満は無いんですけど、やっぱり身分は奴隸ですからね。」

「……仮にですよ? ネルさん自身が自分で身請けをしたらどうなるんですか?」

「私が私を身請けするの?…… そうねえ、それならローダーになつてお金を稼いで、いつかこの町の外へ出てみたいな。」

「この町の外へですか?」

「そうです。レンジさんみたいに外から来る人には分からないと思いますが、私みたいなミーミル産まれミーミル育ちにとつて外の世界は憧れの対象なんです。」

「そんなもんですか?」

「そんなもんなんです。」

紅茶に口を付け、サービスで出されたケーキを頬張るレンジとナル。

「……ネルさん。」

「はい、何ですか？」

「500万ジニーあればネルさんを奴隸の身分から買い取る事が出来るんですよね？」

「そうですね。まあ夢みたいな話ですけど。」

「そうですか……」

ケーキを一口頬張るレンジ。

「まあギルドの安い給料じゃいつになるかは分からないんですけどね？」

そう言いながら笑みを浮かべ最後の一 口を食べるネル。

「さて、暗い話はこれでお仕舞いにしましそう？レンジさん、これからしたい事はありますか？」

「そうですねえ……服を揃えたいです。何だかブカブカになっちゃつて。」

「それだけ余分な筋肉が付いていたって事ですね。ナイトの肉体は小さくても筋肉の結晶度が違いますから。それじゃあ服を揃えに行きますか！」

会計を済ませ外に出る。丁度お昼時なせいか、行き交う人々も増えていた。

「これから行くお店はギルド一押しのお店ですから、品物は逸品揃いですよ。」

「それは楽しみですね。」

ギルド職員オススメの店とあって、レンジの中での期待値は上がる。財布カードの中には20万ジニー程が入っていたはずだ。それだけあればそれなりの服を揃える事が出来るだろう。

大通りを暫し歩き、わき道に入りちょっと歩いた場所にそのお店はあった。

『衣服専門店ミコウ』

ここも通い慣れているのか、物怖じせずに店に入していくネルの後を追い、レンジも店の中へと入った。
店の中はこれでもか!と言わんばかりの衣服がズラリと陳列されていた。

「ミコウー! いないのー?」

「はいはーい! ちょっと待って下さいねー。」

ネルがカウンターの奥へと声を掛けると奥から反応があった。少し待つていると店の奥からエルフの女性が出て来た。

「何だ、ネルか。」

「何だは無いでしょ、お密さんを連れてきたんだから。」

「あら、こりゃしゃい。ネルがお密さんを連れてくるなんて珍しいわね。」

「レンジです。よろしくお願ひします。」

「はい、じつは彼女一人で切り盛りしてこなよつた。」

「一ツ二つと笑みを浮かべ返事をする//コウと呼ばれる女性。どう

やうこの店は彼女一人で切り盛りしてこなよつた。」

「ミコウ、確かにナイトスーツがあったわよね？」

「はい、揃えていますよ。あ、もしかしてレンジさん、ナイトですか？」

「はい、今日クラスチョンジしました。」

「それはそれは、おめでとうございます。それじゃあ早速サイズを測りましようか。」

肩幅、首回り、股下と各部分のサイズを測つていぐ。

「うん、これなら既成のナイトスーツで十分ですね。」

「ナイトスーツっていうのはナイトなら必ず着なきゃいけないんですか？」

「そんな事はありませんよ？現にファイターでもナイトスーツを着ているローダーもいますからね。」

「本来ならそれぞれのクラスに応じた服装があるんですけど、防刃性、防火性、防水性が他より優れているからナイトスーツを着るローダーが多いのよね。」

「へえ、そんなに優れた服なんですか。」

「ミコウはそのナイトスーツを個人に合わせて1から作成しているんです。個々人に合ったスーツが作れるから服に迷つたらこの店に来れば問題は無いですよ。」

「それは有り難いですね。」

「どうぞ覗願にして下さいね。」

ニッコリと笑みを浮かべ、ミコウは店内に展示されている服の中からサイズの合うナイトスーツを数着見繕つて持ってきた。色は全て黒がベースに色々と模様が刺繡されていた。

「一応サイズ的にはこれで大丈夫だと思いますが、試着してみて下さい。」

「分かりました。」

試着室に入り早速ナイトスーツに袖を通していく。用意されたスーツは3着分だ。その全てに袖を通して、動きに支障は無いかをチェックする。

「どうですか？」

「何か、思っていたより動きやすいですね。」

「それはナイトの肉体を持つていてるからですね。ファイターやマジシャンなら所々調整しなきゃいけませんから。」

「ふむ。ミコウさんこの3着でいくらですか？」

「そうですねえ、本来なら6万ジーーですけど、ネルの紹介だし5万ジャストでいかがですか？」

「分かりました。」

財布カードにて支払いを済ませる。

「これはサービスにしておきますね。何かありましたらまた来店して下さい。」

最後に髪紐を手渡され、一礼。「ひとつ微笑みながりをつけて下さい」
ウに礼を言い、レンジとネルは店を出た。

「さて、次は何にしまじょうか?」

荷物を小脇に抱え、長くなつた髪をオールバックに縛りながらレンジは考える。取り敢えず買うべき物は買った。後は何が残つていただろうか?

「……取り敢えず、荷物を宿屋に置いてから考えても良いですか?」

「そうね、手荷物一杯じゃこれ以上買い物が出来ないものね。」

2人は一路レンジの宿泊している宿屋、若葉亭へと向かつた。

「レンジさん……」ここに泊まっているんですか？」「はい。何か問題でも？」

「問題ありますよー。ナイトにまでなったんだからそれなりの宿屋に泊まる事が出来るんじゃないですか！」

「宿屋に何かあるんですか？」

「上流の宿屋になるとベッドに疲労回復の魔術陣が刻印されていたりするので、疲れを翌日に持ち越さなくとも連日ダンジョンに入れたりしますよ？」

「へえ……そんな物まであるんですか。」

「取り敢えず荷物を全部持つてきて下さい。次は宿屋を探しましょ

う！」

ネルの言葉通りに自室から荷物を全て持ち出したレンジ。受付のカウンターに座っていた女の子に鍵を返す。

「今までお世話になりました。」

「いいえこれが仕事ですから。これからも頑張って下さいねー！」

激励をされつつ宿屋の外に出る。

「レンジさん……荷物つてこれだけですか？」

レンジが持ち出して来たのは麻袋一つだけである。あまりの荷物の少なさに、ネルは少々戸惑つているようだ。

「ここちに来てから買い物らしい買い物をしてませんからね。」

「それじゃあもしかして今の服装でダンジョンに入っているんですね

か！？」

「そうですよ？動きやすいから便利です。」

レンジの今の服装は、先程購入したナイトスーツの上からハードレザーの鎧一式という軽装備だ。何から何まで常識はずれのレンジに、ネルは少々呆れ返った。

「はあ……もう驚くのも疲れてきました。」

「別に驚かせるつもりは無いんですけどね？」

「……良いです。今からレンジさんにはマーミルでの常識を教え込みますから。取り敢えず宿屋からですね。レンジさんは一回ダンジョンに潜つて、どれくらい稼ぎますか？」

「今は大体4万ジニーぐらいですね。」

「それなら宿屋は一週間で4万ジニー前後の宿屋を探しましょう。」「分かりました。」

ただ突っ立っているのも何なので、レンジとネルは宿屋通りを歩き始めた。

「宿屋の相場は1回のダンジョンでの稼ぎと同等の場所を選ぶべきです。それなら1週間に最低でも1回ダンジョン入りさえすれば宿代は確保出来ますからね。」

「成る程。」

宿屋通りを歩き続け、1週間で4万2千ジニーといつ宿屋、『鈴の屋』を見付けた。そこで案内されたのは最上階のスイートルームで、5階建ての宿屋の5階に2部屋しかない内の一つがレンジに宛がわれた。

「何だか広さに落ち着かないですよ。」

「その内慣れてきます。荷物を置いたら次は装備を整えに行きますよ?」

「装備はこれで十分ですよ。変に重装備にして動けなくなつたら困りますから。」

「ナイトに転生しているなら多少の重装備も気にならなくなりますよ?」

「ん~……でも今の所これで十分ですから装備は大丈夫です。必要になればその時に揃えます。懐がもうちょっと暖かくなつた時にでもね。」

「……そうですか。ならその時は言つて下さごね?良い店を紹介しますから。」

「分かりました。」

「ん~、これで大体の環境は普通になりましたね。」

「時間を取り落してしまつてしません。」

「レンジさんのアフターケアで仕事を抜け出して来てるんですけど? これくらいはしますよ。」

「それでもやっぱりありがとうござります。」

深々と頭を下げるレンジにネルはどうしたら良いのか困ってしまう。

「ん~そうですね、ミーミルの外の世界の話でも聞かせてもらひませんか?」

「ミーミルの外ですか?」

「はい。レンジさんは旅をしながらミーミルに来たんですね?それなら色々な所に立ち寄った話が聞きたいです。」

「まあそれなりに話はありますけど……そうですね、何の話をしましょうか?」

「ミーミルに来る前は何処にいたんですか?」

「ネルト帝国ですね。」

「そこで話聞かせてくれますか?」

「分かりました。」

ネルは椅子に腰掛けレンジはベッドに座り、レンジのこれまでの旅の道程を話し始めた。ネルはそのどれにも一喜一憂し、レンジに次の話を次々に引き出されるのであった。

「あ、もうこんな時間なんですね。」

ネルが部屋の壁に掛けてあつた時計に手をやり、レンジの話を止める。

「それじゃあ私は一旦ギルドに戻ります。」

「はい。今日はありがとうございました。」

「お礼にミーミルの外の話が聞けたので十分ですよ。また機会があ

つたら聞かせて下さいね？

「旅の中の話で良ければいくらでも。」

それじゃあ、と言い残し、ネルは部屋を後にした。残されたレンジは、取り敢えず今日買った物と私物の片付けに手を付けていった。

EXPO08（後書き）

誤字脱字がありましたら感想にて指摘をお願いします。

また、感想や評価が作者のやる気に直結しております。「早く更新しろ」でも結構です。感想お待ちしております。

宿屋を変えて2日目。まだ見慣れない天井を見上げながらレンジは田を覚ました。

流石に1週間で4万2000ジーーもするだけあって、若葉亭とは違い、今度は自室にシャワールームが備え付けられている。これなら誰にも気にせずに朝風呂に入れるな、と満足しながら朝の時間を潰していくた。

朝風呂が終わると前日に購入したナイトスーツに袖を通す。動きやすさは認めるが、姿見を見るとまだまだ着られている感が十二分に現れていた。

「……まあその内慣れるだろ。」

新鮮に感じる感覺もその内無くなるだろ?と見えながら刀を腰に差し、階下の食堂へと顔を出す。宿泊している証である部屋の鍵を提示すると、食事の説明をされた。

「ウチはバイキング方式ですから、好きな物を取つてお召し上がり下さい。」

見ると他のローダー達も自分の好みの料理を選んで食べていた。レンジもそれに倣い、サラダとハンバーグ、パンにスープを取り揃えテーブルに付く。

「いただきます。」

手を合わせ食事を始める。

「ん、美味しい。」

サラダはシャキシャキとみずみずしさが残る食感で、反対にハンバーグは肉汁タップリジューシーで美味しい。パンも焼きたてのふくらした食感でスープに浸して食べるととてもマッチしていた。

『食事も宿屋を選ぶ条件の一つ』

そうネル嬢が告げていたのも納得出来る。朝から好きな物を好きだけ食べれるこのバイキング方式にレンジは満足しながら食事を進めていった。

「ふう、食った食った。」

2度程おかわりをして腹が落ち着いた所で食事は終了した。

さて、これからダンジョンに向かう訳だが、宿を出てから、いや、宿屋の食堂に顔を出した時からずっとこちらを伺うような視線があちこちから感じられる。これもナイトにクラスチェンジしたから感

じられるよつになつたのだろうか？

何か危害を加えて来ない限り視線を無視する事に決めたレンジは、一路、神魔の門がある広場へと足を進めた。

「あのぉ、すいません、ちょっと良いですか？」

「はい？」

視線を送つてきた方から接触してきたのだから、何があるのだろう。レンジは話を聞いてみる事にした。

「私達普段は3人でパーティーを組んでダンジョンに挑戦しているんですけど、前衛1人が怪我で欠けちゃつて……その、良かつたら一緒にダンジョンに入りませんか？」

何て事は無い、パーティの勧誘だった。

「どうして俺なの？」

「はい？」

「いや、他にもローダーなら沢山いるじゃないか。何で俺を選んだのかが聞きたくてね。」

「それはナイトスースを着ているからですね。少なくともそれだけでロークラス以上のローダーだと叫う事が分かります。」

「……理由はそれだけ？」

「後は両手の甲を見て下さい。」

「両手の甲？」

自分の掌を裏返すと、そこには龍の顔を現したようなタトゥーがあつた。

「ファイター 拳士なら片手の甲に、ナイト 騎士なら両手の甲にその刻印が刻まれているんです。ですから貴方は本物のナイトだと分かるんです。」

「へえ……気付かなかつたな。」

「それで、どうでしようか？臨時でも良いんで私達のパーティーに参加して貰えませんか？」

「ん~、ごめん。ちょっと確かめたい事もあるし、俺は基本ソロで潜ろうと思っているんだ。」

「そうですか……残念です。」

「ごめんね。」

そう言つて断ると周りからの視線は大分和らいだ。皆自分のパーティーに誘あうと画策していたのだろう。

これからもこんなやり取りが続くのは面倒だ。神魔の門に向かう前に近くにあつた衣料店に寄ると、手の甲が隠せるグローブを買い、早速身に付けた。これでナイトだと分かる人は減るだろう。実際に周りからの視線は大分減つたようだ。

「よしつー。」

氣を取り直して神魔の門へと向かう。自分の順番が回つて来るのを待つた。

「20階へ。」

やつと順番が回ってきた。

クラスチェンジしてナイトに転生したとは言え、今のレンジはクラスチェンジ用に体に溜まっていた経験値を全て使いきった状態であるから注意するように、と、ネル嬢は教えてくれた。それなら一気に40階から潜らず、今まで通り20階から入って体の様子見をしていこうと考えての行動だ。

指輪がキラリと光り神魔の門が開く。そこに現れた階段を1段1段下りていく毎にレンジの意識が戦闘モードに切り替わっていく。

階段が途切れ20階へと到達した。レンジの方もバツチリ戦闘モードになっていた。

「よつしやあつ！」

気合を入れると刀を下段に構えながらダンジョンを進んでいく。

「おおおおおお！」

早速実験体が現れた。

先ずはどれだけ強くなっているのか、鍔迫り合いにて力比べをしようと唐竹割りに刀を振り下ろした。

「えつー!？」

勿論防御の構えを見せたゴブリンだったが、レンジの持っている刀はゴブリンの剣」とゴブリンを両断した。その切れ味の鋭さにレンジは驚いた。手に残った感覺も、まるで柔らかい肉を切ったような感覺でしかなかつたのだ。

「……何が起じつているんだ?」

自分の持つている刀を見ながらレンジは呟く。ナイトへと転生してからずつと分からぬ事だらけだ。

この不気味な程の切れ味の鋭さは一回置いておこうと鞄に仕舞つた。

となると、残された戦闘方法は徒手となる。まあまだ20階へ入つたばかりだ。何とかなるだろ!と容易な考え方でレンジはダンジョンの奥へと進んでいった。

2匹目のゴブリンに対峙した時、レンジにはある疑惑があつた。それは体から湧き出るかのように吹き出している『闘氣』を試すには絶好の機会だという事。素手で構えたまま剣を持っているゴブリンにジリジリと距離を詰めていった。ある一線を越えるとゴブリンは手にしていた剣を振りかぶつて来た。それをレンジは両の手で受け止めた。俗に言つ白刃取りである。

「破あつ！」

空いていた足でゴブリンの頭部を蹴り飛ばす。勿論足に鬪氣を込めて。すると石榴が破裂したかのようにゴブリンの頭が砕け散った。

「ロークラスで最強の肉体か……」

クラス説明でネル嬢が言っていた事を思い出すレンジ。確かに基礎能力が半端じゃなく上昇している。それに加えて鬪氣という新しい力が加わって、ゴブリン相手なら素手でも楽に制圧出来るようだ。

「よしー。」

鬪気を込めた徒手での戦いに自信を付けたレンジは、そこから現れるゴブリン達に素手で対峙した。ゴブリンの攻撃を鬪氣で受け止め、時には避け、鬪氣を込めた一撃で反撃する。すると、今までの苦戦はまるで嘘だったかのようにゴブリン達はバタバタと倒れていく。これなら刀を使うまでもない。

「ゴブリン相手なら素手でも十二分に対応出来る事が分かつただけでも収穫はアリだ。それは1対1の状況下だけではなく、階を重ねていき、ゴブリンが複数匹現れるようになつても変わらなかつた。鬪氣による攻撃と防御はゴブリンの攻撃を物ともせず、攻撃にいたつては一撃で勝負が付いた。

「流石にあの転生に耐え切つて得た力だけの事はあるな。」

あれだけの痛みに耐えたのだ。それ相応の力が身に付いていなければ割に合わない。結果として、レンジはナイトになつて良かつたと実感していた。

レンジは所々で小休憩を挟みながらどんどん階層を重ねていき、遂には素手のまま30階へと到達した。

「さて、いよいよ本番か？」

30階から現れるスケルトンは、ナイトに転生する前だとほぼ互角だったが、何れ程力量に差が出ているか。それはレンジの確かめたい事の内の1つだった。

通路を進んで行くと小部屋に辿り着いた。そこには既に槍を構えたスケルトンがあり、レンジが部屋の中へと入ると直ぐに攻撃を仕掛けってきた。

ギインツ！

闘気を両腕に集め槍を防ぐ。まるで金属同士がぶつかったかのような音が鳴り響く。どうやらこの階層でも素手で対応出来そうだ。

20階から素手で戦つて来たレンジは、コツを掴んだのか、槍を掴むとスケルトンを引き寄せ頭蓋骨に蹴りを放つた。ガシャンッ！と頭蓋骨が弾け散ったスケルトンは、いつも簡単に宝珠へと姿を変え

えた。

「圧倒的な……」

ゴブリンを相手にしていた時もそうだったが、闘気を駆使しての戦闘はここいらの階層ではほぼ無敵と言つて良いだろう。それほどまでに魔物を楽に倒せるのだ。レンジは鬼眼を使うまでもないと判断し、闘気だけでこの階を乗り切つていった。

35階を制覇したレンジは36階への階段を前に昼飯を食べていた。今日の昼飯は唐揚げとオニギリ、漬け物だった。

「明日は30階から入る事にするか……」

レンジは漬け物をポリポリと食べながら考えていた。

20階から入ると、どうしても時間的に40階くらいで打ち止めになる。それならゴブリンを相手にせず、そろそろ次の魔物と戦つ方が力は身に付くはずだ。

「よしぃ。」

そうと決まつたら手つ取り早くこの階層を抜け出し、40階へと辿り着かねば。
弁当を次元袋に仕舞うと、レンジは36階への階段を下りていった。

36階からの戦いも正に鬪氣さまさまな戦闘だった。
複数のスケルトンに囮まれても鬼眼無しで戦える。それが何れ程の成長であるかはレンジが一番実感していた。

取り敢えず1番近かつたスケルトンの剣を避け頭蓋骨に一撃。そのままの流れで隣にいたスケルトンにも一撃。たつた一瞬の出来事ではあるが、それだけで2匹のスケルトンを撃破した。残つたのは2匹。それも難無く撃破し宝珠を拾い集める。

鬼眼を使わない事で体力の消耗を防げたレンジは、今、まさに絶好調であった。拳一つでスケルトンを撃破していくその姿は、正にナイトに相応しい実力を表しているようだった。

レンジはその後37階、38階と制覇していき、遂には40階まで素手のみの戦闘で到達した。

「40階は確かグールだつたな……」

今の所グールが現れる気配は無い。だが、空気が静まり返つてゐるせいか、自ずと神経は過敏になつていつた。

「オオオオ……」

エンカウン特したようだ。通路の先にある小部屋に入るグールが剣を持って徘徊していた。

グールとは腐った体を持つ魔物だ。スケルトンと同様に攻撃しか頭に無いようで、防御の姿勢は殆んど見せない。しかしその体はいくら切り裂いても再生する。グールを倒すにはその活動を司る核を破壊しなければならないのだ。

先ず鬼眼でグールの核の位置を見なければならぬ。刀もグールの腐った体を切断する為に必要だ。何故だかは知らないが、切れ味が非常に上昇しているこの刀ならば、グールの体を切り裂くのも容易いだろう。久々に鞘から刀を抜き取ると、下段に構えグールに向かつて歩き出した。

「発眼！」

早速鬼眼を発動させ核の位置を調べる。場所は……左胸だ。一気に距離を詰め邪魔な左腕を斬り落とす。

「オオオオ……」

剣を振りかぶつたグールから霸気がビリビリと伝わってくる。グールの剣を刀で受け止めると、これまたスパッと切れた。

「どれだけ切れ味が鋭いんだ？」

まさかここまでとは思つていなかつたレンジであったが、今は戦闘に集中しなければ。

核の位置を把握すると左胸に一突き。核の破壊に成功した。

「オオオオオオ……」

1番の雄叫びを上げながらグールはその場に倒れ込み、宝珠へと姿を変えた。

「ふう……何とかなりそうだな。」

この階層も鬼眼とこの刀があれば何とか乗り切れそうだ。そう実感したレンジは宝珠を拾うと次元袋に入れ、次の階への階段を探してダンジョンの奥へと進んでいった。

「ふう、今日も働いたなあ～っと。」

結局この日は43階で終了した。終了の極め手は腹時計だ。

「さて、換金して帰るか。」

ギルドに向かつてレンジは歩き出した。辺りを見回すと、今日のダンジョンはどうだったと話すローダーに溢れていた。基本ローダーは複数人でパーティを組んでダンジョンに挑むようで、レンジみたいにソロでダンジョンに挑む者はごく少数のようだった。

ギルドに着くと換金のカウンターの列に並ぶ。ギルド内はいつものように喧騒に包まれていた。どうやらギルドにある飲食スペースは、ホールやワインといった酒が飲める事がメインになっているようで、皆一様に酔っ払っていた。

「次の方どうぞ~?」

順番が回ってきた。換金も宝珠の量が多ければ面倒になつてくる。だが、これが収入に直結している事を考えると、あまり文句も言えないのが現状だ。

「はい、計算しますね?」

宝珠最後の1個をケースに収めたら受付嬢が計算を始める。さて、今日の収入はいくらになつたのだろうか？

「はい、5万2300ジニーですね。入金なさいますか？」

財布カードを提示し入金してもらひ。今日1日でナイトスーツ代は稼げた事に満足しながら列を離れ、ギルドを出る。

「あー疲れた！」

やるべき事を終わらせた後は宿屋に戻り食事を取るだけである。腹も空いてきた事だし、さっさと宿屋に戻るレンジであった。

翌日、いつもよりスッキリと田が覚めたレンジは軽く柔軟を始めた。体がいつもより軽く感じる。これが疲労回復の魔術陣が刻印されたベッドの効果か、と一人納得し、シャワーを浴びた。

いつものように朝の準備を整え宿を出る。今日もダンジョンに潜つて資金を稼がなければ。レンジは一路神魔の門へと足を向けた。

前日に分かった事、ゴブリンはもう敵とは呼べない事を踏まえて、ダンジョンには30階から入る事にした。

「さて、先ずは準備運動だな。」

この階層に現れるスケルトンも刀を使わずに圧倒する事が出来る。40階から入つても良かつたが、体のアップも兼ねて、30階のスケルトンから相手にする事にしたのだ。

30階層は素手のみで対応出来る事もあり、ダンジョンの攻略スピードは桁違いに早まった。お陰で昼飯を食べる前に40階への階段を見付ける事が出来た。

「慣らしは終わりだな。」

「ここからは鬼眼と刀の出番だ。鬼眼でグールの弱点である核の位

置を調べ、刀を奮つてそれを破壊する。それほど苦に感じないのは、やはりナイトというロークラス最強の肉体のお陰だらうか。

スケルトン相手に体を動かしてきたお陰で、体はトップギアの状態である。40階層も順調に進んでいた。

途中に小休憩を挟みながら45階まで到達したレンジは、46階を前に昼飯を食べる事にした。今日の弁当は親子丼だった。箸を器用に使い、丼飯を掻き込んでいく。味も満足出来てこれで50ジニーなら安いもんだと思いながら、レンジは昼飯をお茶で流し込んだ。

「よし。」

昼飯を食べてやる気も復活した。後は何階まで潜れるかである。

「目標は最低でも50階に到達だな。」

階段を下り刀を下段に構えるとレンジはダンジョンの更なる奥へと足を進めた。

ダンジョンはほぼ一本道である。通路を真っ直ぐに進んでいけば必ずと次の階への階段が見付かる。ただし1階1階の長さ 자체はそれぞれ異なる為、思つているよりも長かつたりするのだ。レンジもそれを理解はしているが、早く次の階へと進みたいがために戦闘は迅速に行われた。

「発眼！」

鬼眼でグールの核の位置を探し当て、刀をもつてそこを破壊する。そこには一切の無駄が無かつた。

「頭！」

頭蓋骨を核」と切り裂く。

「右胸！」

「腰！」

邪魔な腕を先に切り落とし、胸にある核を突き破壊する。

グールの攻撃を掻い潜り、刀を横一閃。核を破壊していく。

レンジは出会ったグール達全てを一刀の下に斬り伏せていった。40階層に入つてからもレンジの攻略スピードは変わらない。鬼眼と何故か異常に切れ味鋭い相棒のお陰で、複数のグールに囲まれても一撃で突破出来た。

「ふう。これで48階は終了か。」

田の前には49階への階段がある。これを下ればグールとの戦闘も最後となる。一気に駆け抜けて来たせいが、そう感傷に浸る事は無い。それよりも間近に迫つている50階の方へと意識は傾いていた。

「40階層がグールだつたからなあ……」

次に現れる魔物は一体何なのだろうか？
そんな考えで49階を進んでいった。

「オオオオオ……」

グールの雄叫びが通路に響く。この先に間違いなくグールがいる証拠だ。今までの戦闘の経験からレンジは今までと同じように対処に当たつた。鬼眼で核の位置を探し当て、刀をもつて核を破壊する。どうつて事はない筈だった。

通路を抜け小部屋へと入る。早速鬼眼を発動させ、弱点を探し当てる。グールの数は4匹。そう苦労はしない筈だった。

「疾つ！」

1匹目のグールの腰を狙つて刀を奮う。グールは大した防御の姿

勢も見せず腰にあつた核を破壊されその体を光の粒子に変え、残されたのは宝珠だけとなつた。

この調子なら楽勝だ、と軽く考えたレンジであつたが、次の瞬間にその考えを覆す出来事が起つた。

「うわっ！
ギインジ！」

エネルギーの塊が斬撃となつて飛んできたのだ。鬼眼発動の状態だから反応出来たそれに、レンジは刀で弾くのが精一杯だった。

「……どいつだ？」

少なくとも1匹は今のような攻撃が出来るグールがいる。今のは視界内だから反応出来たが、死角からあの斬撃を放たれたら、今頃大きな傷を受けていただろう。

「……そう楽にはいかない、か。」

今の一撃でレンジは意識を改めた。例えどんなに有利な状況でも全力を出し尽くさねば負けてしまうかも知れない。命を賭けてダンジョンに入るのだ。1秒たりとも気は抜けないので。

「あいつか……」

斬撃が飛んできた方向を見ると、一番奥に一本の剣を構えたグールがいた。他のグールが同じように斬撃を飛ばして来たら、かなり気を使って戦わなければならなかつただろうが、残りのグールはただ持つている武器を振り回すだけであった。

斬撃を飛ばすグールを視界から外さないように位置取りしながら次のグールへと意識を向ける。弱点は腹だ。ダンツーと踏み込むと一気に距離を詰めグールの腹にある核を突き破壊する。その瞬間に再び斬撃が飛んでくる。どうやらこちらが攻撃をした後の一瞬を狙つて放つていいようだ。

ギインツ！

「頭つ！」

辛うじて飛んできた斬撃を打ち払い、次のグールに立ち向かう。

上段から下段まで、刀を一気に振り下ろす。

やはりこひらの攻撃後を狙つてているのが分かつた。残り2匹、レ

ギインツ

ンジは鬼眼で探し当てた弱点の核を破壊し最後のグールを見やつた。

鬼眼により弱点は見透かしている。左肩に核はあるようだ。

袈裟斬りに刀を奮うと防御の概念が無いグールは簡単に討伐出来た。

ふう、と溜め息を一つ吐く。

床に落ちている宝珠を拾い集めながら今の戦闘を振り返る。まさか飛び技が飛んでくるとは思いもしなかった。鬼眼状態でなかつたら飛んでくる斬撃すらも見えず、致命傷を負っていたかも知れない。

「全く油断が出来ないな。」

ダンジョンに対する意識を再度改めていた時だった。

「ん？」

最後に倒したグールだが、そのグールが使っていた武器である剣がそつくりそのまま残っていたのだ。普通なら死体と一緒に光の粒子となつて消える筈の剣が。

「特殊な武器、つて事か？」

1番最初にギルドでネル嬢に言われた言葉を思い出す。

『ダンジョンには特殊な武器や宝が眠っています。それはギルドで

も高く買い取らせて頂いてます。』

「これがその特殊な武器という物なのだろうか？」

取り敢えず剣を手に取り、何も無い壁に向かつて一振り。すると、体から少し体力が吸い取られ、普通の田では見えない斬撃が壁を破壊した。

これは良い武器を拾つた物だと思っていたその時、誰もいない筈の所から声がした。

「危ないにやあ。武器の試し切りでウチの店は壊さんといて欲しいにや。」

新手の魔物か！？と見てみると、

『迷宮500年の歴史を刻む店、マチュピチユ』

『戦士一押しの店、マチュピチユ』

『安心安全激安店、マチュピチユ』

と書かれた看板が吊るされていた。

「お、何や兄ちゃん、ウチの店に何や用かにや？」

店主であろう、真っ黒の体をした獣人のよつた魔物が口を開いた。

「「「」は……店なのか？」

「店やなかつたら何に見えるのか聞きたいやあ。」

「ダンジョン内に店があるなんて初めて聞いたぞ？」

「何や兄ちゃんモグリやな。まあウチも何でこんな場所に店が出来るのかはよう分かつてこや。いけど、ダンジョンには幾つかウチみたいな店が何軒あるこや。」

「ここに来る前は300階層にいたらし。その階層になると中々戦士はやって来ない為、ただ回るだけの退屈な時間を過ごしていたらしき。

「魔物は魔物なんだろ？、襲われたりしないのか？」

「ウチらはダンジョンの魔物と違い意識もハッキリしてるこや。それに、ウチを倒したとしても存在力は入らないこや。それにここで売っている物は金を支払わないと店から出す事も出来ないのこや。

「へえ、上手い事出来るんだな。」

「そんな事より兄ちゃん、ウチで何か買い物してくのかこや？」

「武器はこれがあるから十分なんだが？」

レンジは腰に差してある刀を見せた。

「つー兄ちゃん！その武器はどうで見つけたのこやー？」

「これ？これは気付いたら傍にあつたよ。」

「兄ちゃん頼むーちょっと見せて欲しいこやー。」

「別に構わないけど……」

レンジは腰から鞘と店主に渡した。

「フムフム……成る程ー。やつぱりなのには、」^{ふつのみたま}これは布都御魂なのにやー。」「

鞘から刀を抜き取り、刀身を眺めていた店主が大声で叫んだ。

「布都御魂？」

「そうにやー。全ての武器の神、ロスト中のロストー！それがこの刀の本来の姿なのにやー。」

ロストとは古代に神々が残した遺産とも呼ばれ、そのどれもが強力な武具であり、かつての大戦の話でも度々登場する、まさに伝説級な武具だ。

ちなみに武具にはランク付けされており、下からノービス、ガベージ、オーリック、そしてロストとなる。

「これを持っている事は、兄ちゃんと布都御魂にバスが繋がつてゐつて事にや。やたら切れ味が上がつたりした事は無いかにや？」

それならば思い当たる事がある。ナイトへとクラスチェンジした前と後とでは、切れ味が劇的に増したのだ。

「成る程なのにや。やつぱりバスは繋がつてゐるのにな。」

「パスが繋がると何があるのか?」「

「持ち主が強くなれば強くなる程に、布都御魂も切れ味が増していくのにや。」

「ほお、それは良い事を聞いたな。」

「他にも布都御魂を強化する方法はあるけどにや。まあ良いものが見れたにや。」

「そりや良かつたな。」

「さて商売なのにや。兄ちゃん、何か買つていくかにや?..?」

「この店は販売だけじゃなく買い取りもしているか?」

「勿論価値のある物なら何でも買い取るにや。」

「それならこれを買い取つて欲しい。」

そう言つてレンジは先程拾つた剣を出した。

「ん~、斬撃飛ばしの剣か。」

「見ただけで分かるのか?」

「500年もこんな仕事してゐにや。大体の武器なら一目で分かるにや。これを買い取つて欲しいのかにや?」

「そうだ、いくらになる?」

「斬撃飛ばしシリーズはありふれているのにや。だからそんなに高くはないにや。出せても4万ぐらいかにや。」

「そうか……」

「そんな事より、兄ちゃんもつと良い使い道があるにや。」

「良い使い道?」

「布都御魂は特殊な武器にや。強化する方法は2つあるにや。1つはさつきも言つた通りパスが繋がつた者が力を付けた時、もう1つが他の武器を吸収する事にや。」「他の武器を吸収する?」

「物は試しにや。布都御魂に斬撃飛ばしの剣を重ねて、アテナ、と

唱えるのにや。」

レンジは言われた通りに剣を重ね、アテナ！と叫んだ。すると布都御魂が神々しく光り出し、目を開いてはいられない程の光量が辺りを包んだ。

「布都御魂の神還りにやー他者を吸収してより強くなるのにやー！」

『神還り』というキーワードを聞きながら光が収まるのを待った。ほんの数秒間光り続け、残ったのは布都御魂だけであった。

『神還り』とやらをした相棒を取り、壁に向かって奮つ。すると体力が少し吸い取られ斬撃は放たれた。

ガガガガガツ！！

壁には今放った斬撃の痕が走っていた。

「無事成功したようだにや。」

「これは中々使えるな。」

1本の刀に様々な力を付与する事が出来るのは大きなアドバンテージだ。これからはどんな能力を吸収させたか覚えておかなければ。

「それはそうと、兄ちゃん何か買つていいくかにゃ？」

「やうだなあ……」

店に飾られている剣や槍等を見ながら物色していく。その中でレンジが目を付けたのは槍でも剣でもなく、漆黒の鎧とマントの一式だった。

「これ、いくらだ？」

漆黒の鎧を指差し訊ねる。

「これは20万ソウルにゃ。中々売れないから絶賛値下がり中にゃ。」

「ソウル? ジー? ジヤダメなのか?」

「兄ちゃんも持つてるにゃ。地上では宝珠とか呼ばれてるそれがこの通貨にゃ。でも辞めといた方がいいと思うにゃ。これはブランクスケイルと書いてオーリッククラスの装備にゃ。だけど闇属性が高くないと装備してもあまり効果は得られないのにゃ。」

「俺は他の属性より闇属性が高いらしいから大丈夫さ。」

「人間なのに闇属性が強いのか? 兄ちゃん不思議な体をしてるにゃ。」

「それにしても効果のある属性が決まってるなんて、どんな効果があるんだ?」

「闇属性を発せられれば光属性以外の属性攻撃によるダメージを5割カットするにゃ。」

「買つた。」

次元袋から宝珠を取り出していく。それを1個1個計算していく店主。

「……ん~、12万ソウルしか無いにや。今着てる装備を買い取つても2万、6万ソウル不足にや。」

「そうか……」

レンジは悩んだ。一田惚れに近い形で選んだ装備、それがもう少し手に入れる事が出来るの。この階をもつとブリツキ、グールを倒してからまた来ようかと思っていた時だった。

「金が無いなら他の方法もあるにや。」

「他の方法?」

「そうにや。経験値で支払いが出来るにやよ。見た所、兄ちゃんは経験値をそれなりに溜め込んでいるみたいにやから、それで支払いを済ませる事も出来るにや。」

「そうか。ならそれで頼む。」

あつさつとそれで済ませると店主の方が驚いていた。

「それで?どうやって支払えば良いんだ?」

「簡単に。ウチとキスをするだけにや。キスしている間にウチが

6万ソウル分の経験値を吸い取るにや。」

「そうか。やつてくれ。」

「……もう少しあと抵抗して来るかと思ったのに……兄ちゃんは胆が座つてこむのこや。」

そう言いながら顔を近付けてくる店主。レンジはそれに身を任せた。

唇と唇が触れ合った瞬間、レンジは「」の体力がどんどん吸収されているかのような感覚に包まれていた。6万ソウル分と言っていたが、それがどのくらいの体力を消耗させるのかは分からぬ。だが、この道を選んでしまったのだから何とか耐えようと心に決めた。

「…………ふはつ。支払い完了こや。」

数十秒程で経験値での支払いは終了したが、レンジは思っていた以上の疲労感に包まれていた。

「これでブラックスケイルは兄ちゃんの物にや。」

今着込んでいる装備を手渡し、その代わりにブラックスケイルを受け取る。装備の素材は分からぬが、今までのハードレザー装備に比べたら格段に防御力は上がつただろつ。

「動き辛い所は無いかにや？」

「……問題無いな。」

その場で軽くストレッチをしてみるが、ブラックスケイルは動きの邪魔にはならないようだ。肩当てに胸当て、肩口から肘、手首までを覆い隠し、下半身は要所をプレートで覆い隠したズボン。そして見た目は少し薄汚れたマントを首に巻く。そのどれもが動きの邪魔にならない。まるで採寸を測つて作ったかのような着心地だった。

「それじゃあ俺は先に行くよ。」

「分かったにゃ。ウチと同じひつな店に出会つたら贔屓にしてにゃ。」

「その店に会えたらな。」

深淵なるダンジョンで他の店にも出会す機会などほほ無いだろう。だが、レンジは何となくまた次があるような気がしてならなかつた。

「ふう……」

あれから50階へと続く階段を探してダンジョンの中を迷ったレンジは、何とか49階の終着点に辿り着いた。体力的にはもう1階分くらいは残っている。50階を越えたらさつさと地上に帰還する事を頭に入れ、レンジは50階への階段を下りていった。

50階に到着した。光る岩苔のお陰で視界は良好だ。この階からは一体どんな魔物が現れるのか全く情報は無い。それでも何とかなるだろうと考えていたレンジであつたが、敵が現れた瞬間にチッと舌打ちをした。

現れたのは四足歩行のグレイツスタンプと呼ばれる、全長5メートル程の猪だった。

グレイツスタンプの攻撃手段は突進の1つのみである。だが、たかが突進とは言い切れないのが悩みの一つだ。その速度は鬼眼発動状態のレンジより早く、しかも頭部を守る為か鼻が異常にデカく硬い。仕方無くレンジは鬼眼を使用した。

「発眼！鬼眼呪縛！」

いくら動きが早くても動けないのなら絶好の的だ。レンジはグレイツスタンプの頭上まで飛び上ると頭蓋骨を天辺から布都御魂で突き刺した。

「グオオオオ……」

一撃で事は収まつたが、体力は残り少ない。もしパラメーター等

があるならレッヂシグナルゾーンに突入しているだろう。

それでもどうしても鬼眼に頼らざるをえない状況に、レンジは根性で耐え抜いた。グレイトスタンプと6度の戦闘を重ね、何とか50階からの脱出の扉を見付けた時は、レンジは疲労困憊で布都御魂を杖代わりに歩いていた。

「ふいー、やつぱり地上は安心だなあ……」

何とか地上に帰還したレンジであつたが、まだギルドでの換金が残っている。最後の体力を振り絞つてレンジはギルドへと向かつた。

相変わらず喧騒絶え間ないギルド内ではあるが、今のレンジにとっては騒がしい以外の何者でもない。出来るだけ耳と耳を塞ぎながら自分の順番を待つた。

程無くしてレンジの順番が回ってきた。レンジは次元袋から宝珠を取り出し、ケースに嵌めていく。

「それでは計算しますね。」

受付嬢は力チャ力チャとキーボードを打つ。やがて計算が終了し

金額を告げられた。

「2万と350ジーですね。」

マチュピピュで宝珠を使ったので、今日の収入はその程度の物だった。

ギルドを後にして宿屋である鈴の屋へと戻る。

「おかえりなさい。お食事にしますか？」

「……いや、今はいいです。」

レンジは真っ直ぐ自室へと戻った。ブラックスケイル装備を脱ぎ捨てるとそのままベッドに倒れ込む。流石に今日は疲れた。

出来ればそのまま睡眠に移行したい所だが、いつものお決まり、布都御魂の手入れだけは行つた。希少価値があると分かつてからか、より丁寧に磨きあげた。お陰で愛刀はキラリとした輝きを取り戻した。

「ああ、もうダメだ。」

晩飯時だが、疲労から来る睡魔には勝てずレンジはそのまま寝入ってしまった。

EXPO10（後書き）

気が向いたら感想や評価を頂けたらありがとうございます。

EXP011（前書き）

ユニーク6万突破、お気に入り1000件突破。

こんな駄作にありがとうございます。

前日食事も取らずに就寝したレンジは、空腹で深夜に目が覚めた。この時間帯ならむづ宿屋での食事は終わっているだろう。

「はあ……仕方無いか。」

あまり金の無駄遣いはしたくないが、空腹には耐えられない。レンジは宿を抜け、酒場が多く連なる通りへと向かった。
案の定酒場ならまだ店が開いていた。気になる店に入つても良いのだが、何となく深海へと足を運んだ。

「おっ、こりひしゃい。確か、レンジ君、だつたか?」

「覚えてもらえて光栄ですよ、ガトースさん。」

「まあこちとら客商だからな。自然と一度会つた奴でも覚えちまうのや。それで?酒でも飲みに来たのか?」

「いえ、食事です。何でも良いんでお任せで作ってください。」「はこよつー任せときなー」

ガトーの料理が出来上がるまで、ぼーっと周りを観察するレンジ。皆、酒を飲みながら楽しそうに談笑している。そのどれもがパーティを組んでダンジョンの攻略にあたっているのだろう。ソロでダンジョンの攻略に挑むのは本当に極僅かだというのが実感出来た。

「レンジ君はパーティー組まないのかい？」

料理を運んできたガトーさんの開口一番がそれだった。

「別に孤高を気取っている訳じゃないんですけどね。ただやりたい事や確かめたい事があつて、パーティーじゃ確認出来そうにないからソロでダンジョンに入ってるだけですよ。」

「何だ、パーティーに入るきっかけが無かつただけか。今は何階ぐらいいまで潜つているんだい？」

「今日は色々ありましたけど、何とか50階までは到達しました。」「へえ～っ！人は見掛けに因らないって言うが本当にそうなんだな。レンジ君はミニミルに来てまだ間もないだろ？ソロでそんだけ進んでりやいつかは条件の良いパーティーの勧誘も受けるだろうぞ。」「だといいですけどね。いただきます。」

運ばれてきた料理、シチューに手を付ける。

「ん、美味しいです。」

「そうか。まあゆっくりしていいじゃ。」

そう言い残しガトーは厨房へと戻つていった。レンジは空腹もあつてか、追加で2杯シチューをおかわりした所で満足した。

「うわすれました、と。」

会計を済ませ店の外に出る。まだ季節は寒くなく、夜になると心地良い夜風が吹いていた。

食事も終えたしやる事の無いレンジは、そつと宿屋に戻り、明日に備えて再び就寝した。

翌朝。朝飯をしっかりと食べ、いつものように準備を整えたレンジは、早速神魔の門へと向かった。

両手にグローブを付けてクラスを隠しているせいか、今日はパートナーに誘つて来る人はいない。まあ来たとしても面子によるから一概にどちらが良いとは言い切れないが。

「40階へ。」

今日も準備はしっかりと整ってきた。それに今日のダンジョン攻略の出来如何では60階に進むかどうかを決めるのだ。階段を下りていき、40階に到達した時には完全に戦闘モードになっていた。

「よしー！」

気合いを入れ、今日は最初から全開で行こうと決めたレンジは、早速鬼眼を発動させ布都御魂を抜いた。グールなら鬼眼を発動させていれば、複数匹が相手でも遅れを取る事は無い。鬼眼で核を見付け、後はそれを破壊するだけである。

41階、42階、43階と順調に進んでいき、44階に到達したレンジはある事を試そうとしていた。

それは昨日神還りし、強化された布都御魂である。

斬撃を飛ばす事が出来るようになつた相棒で、離れた位置にいるグールの核を目掛けて斬撃を飛ばしてみた。

「破つ！」
バギンツ！

飛ばされた斬撃は真っ直ぐに核へと飛んでいき、見事一撃で核の破壊に成功した。核を破壊されたグールはその場で倒れ、宝珠と化した。これで遠距離攻撃も可能になつたわけだ。

順調に力を付けていっているのが実感出来る為、レンジは嬉々としてグールを片付けていった。

49階。今日1日だけでも3桁近く倒して来たグールもこの階で終了だ。手始めに近くにいたグールの右胸にある核を破壊する。その体の流れのまま、そのまた近くにいたグールの核を破壊していく。

鬼眼と布都御魂の併用は、今の所敵無しだ。

最後の1匹を倒した所で宝珠を拾い集めていく。大事な収入源である宝珠を、1個も残さずに拾い集め、次元袋に仕舞う。

さて次は何匹湧いているのだろうか？

今レンジにはそんな考えが出来る程の余裕があった。勿論隙など無い。既にグールは戦闘相手として役が勝ち過ぎてているのだ。ナイトの肉体に闘気、鬼眼に布都御魂、そしてスラッシュと呼ばれる斬撃飛ばし。レンジが勝つ要素はいくらでも揃っている。そして、こうしている間にもレンジは経験値を吸収して強くなっているのだから。

49階で現れる魔物を討伐し終え、50階を前にして昼飯休憩を挟んだ。

「IJJから先はグレイトスタンプか……」

鬼眼呪縛で動きを止め、後は脳を破壊する。前日にハマった戦法だが、今の所それ以外の対処方法が思い浮かばない為、そうせざるを得ないのが現実だ。

「……まあなるよつになるか。」

レンジは食べ終えた弁当箱を次元袋に仕舞い、50階へと下りていった。

鬼眼は発動させているだけでも体力を消耗する。鬼眼の技を使うなら尚更だ。レンジの体力は残り6割程。まだ体力的には若干の余裕がある。

「鬼眼呪縛！」

早速現れたグレイトスタンプに対し呪縛をかける。突進してきたグレイトスタンプは、まるで金縛りにでもあつたかのようにその動きを止める。後は活動を司る脳を破壊すれば終了だ。
勢い良く飛び上がり、グレイトスタンプの脳を布都御魂で突き刺す。

「グオオオオ……」

グレイトスタンプが断末魔を上げる。呪縛を解くとズシンと倒れ宝珠へと姿を変えた。

「先ずは1匹、と。」

いざなは鬼眼無しで倒したい物だと考えながら、レンジは次のグレイトスタンプを探してダンジョンの奥へと足を進めた。

常時鬼眼を発動させている為、レンジの体力は徐々に削られていく。体力の残りが3割程になつた頃、レンジは何とか55階に辿り着く事が出来た。

小休憩を挟み、僅かではあるが体力の回復を待つ。今日も数多くの魔物を倒してきた。経験値もそれなりに吸収している。今日と同じように明日からもダンジョンで戦闘を重ねていけば、その内体力も増えていくだろう。

「50階層辺りが今の俺には丁度良い狩り場なのかも知れないな。」

取り敢えずの目標に近付く為にも、確実な力を身に付けなければならぬ。コツコツとだが確実な力を。

そう判断したレンジは休憩に見切りを付け、再び歩き出した。

今までの経験上、ここから先、56階からはグレイトスタンプが複数匹現れる筈だ。だが、鬼眼呪縛を使えばそれも難無く倒す事が出来るだろう。それが複数を相手にしてもだ。それほどまでに鬼眼の能力には自信を持つていてるレンジであった。

56階に着いた。通路を進んでいくと、早速グレイトスタンプは現れた。

「鬼眼呪縛！」

部屋の中にいたグレイトスタンプは2匹。視界に2匹が収まつた瞬間を狙い、鬼眼呪縛を発動させ、その動きを封じ込めた。

「さて、倒すか。」

鬼眼状態レンジは1匹目のグレイトスタンプの頭上高く飛び上がった。天井レスレス今まで飛び上がり、勢いを乗せて布都御魂をグレイトスタンプの頭目掛けて突き刺す。動きが取れないグレイトスタンプはレンジの攻撃を回避出来ずに、自重も加わった布都御魂を脳天に食らつた。

「グオオオオ……」

グレイトスタンプが最後の雄叫びを上げながら焼き消えていく。残されたのは宝珠だけだ。

「よしー。」

確かな手応えを感じながら、残されたもう1匹も同様に対処に当たる。身動きが取れないグレイトスタンプはレンジの攻撃に為す術も無く、先程と同様に一撃で沈んだ。

「ふう……」

体力はそう残っていない。ならば今やるべき事は、一刻でも早くグレイトスタンプを倒し、鬼眼の発動状態を長引かせない事だ。宝珠を拾い次元袋に仕舞う。

「さて、次の獲物は何処だ？」

鬼眼の使用に躊躇しなくなつた今、レンジの力は完全にグレイトスタンプを圧倒していた。

これは驚異的なダンジョン攻略速度であるが、レンジはそれを知る由もない。レンジにとっては只々現れた魔物を倒し進んでいるだけなのだから。

58階に到達し探索を続けてきたレンジであつたが、流石に体力が尽きそうになつた為、今日はこの階にて帰還する事にした。地上への扉を開いて階段を上がっていく。最後の扉を開けば地上へと出る事が出来た。

「ふう……」

溜め息を一息吐くレンジ。ダンジョン内での緊張を解していく。

「……さて、換金だ。」

どんなに疲れていてもそれだけは忘れない。貴重な収入なのだから。レンジはいつものようにギルドへと足を向けた。

ギルド内はいつものように喧騒が絶えないが、もはや慣れたものである。順番が回ってきたら宝珠を換金に回していく。

「はい……それでは計算致しますね。」

この日の収入は8万5210ジーーだった。

着々と収入が増えている。それがダンジョン攻略を表しているかのようでレンジは満足していた。いすれはいつぞやの炎帝や氷帝のように、一度で100万超えの収入を得たいものだと感じながら換金を終了させた。

換金が終わると後は宿屋に戻るだけである。露店を冷やかしながら宿屋へと戻ったレンジは、早速晩飯を食べようと食堂へと顔を出した。宿泊の証である部屋の鍵を提示すると、そのまま食堂へと通してもらえた。

今日のメインディッシュである唐揚げを幾つか取り、後はスープとパンをトレーに乗せて席に着く。

レンジが晩飯に舌鼓を打つていると、食堂には続々とローダー達がやって来た。皆このくらいの時間帯で食事をするのか、と思いながら、集団の邪魔にならないように席を隅に移動し食事を再開した。2度程唐揚げをおかわりした所でレンジの腹は満たされた。

満足しながら食堂から出て自室に向かう。こつものよつて装備を磨き上げるとベッドに横たわった。

「そろそろグールとは戦わなくてもいいかな?」

今日のダンジョンを振り返るレンジ。

鬼眼で核を見付け破壊する。布都御魂があれば難無く行える。最早作業と言つて良い程、グールは格下に感じられるのだ。

それならばいつそ50階から入り、次の階層を目指した方が良いんじゃないだろうか? 60階から現れる魔物の予想は付かないが、鬼眼を使用すれば善戦くらいは出来るだろう。

「……明日だな。明日グールやグレイトスタンプと戦つて決めるか。

」

次の階層に進むか、それともまだグールやグレイトスタンプを相手に経験値を稼ぐか。それは明日のダンジョンで決めようと心に決め、レンジはそつと瞼を閉じて深い眠りについた。

EXP01-1（後書き）

感想や評価を頂けると作者は喜びます。

また、鬼眼の能力も隨時募集しています。こんな能力あつたら便利なんじやないか、といった意見がありましたら、是非報告をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5822t/>

成り上がりっ！(改)

2011年10月2日16時45分発行